

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

本編

2020

8

ISSN 1340-8917



キラリと光るわがまち自慢の全国大会

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



1 巻頭エッセー／若者が活躍する秋田の創生を目指して

佐竹敬久（秋田県知事）

特集

キラリと光るわがまち自慢の全国大会

- | | | | |
|----|--------|-------------------------|-----------------|
| 2 | 基調論文 | イベントを通じた地域資源の創造と経営資源の調達 | 大谷尚之（愛媛大学教授） |
| 6 | 青森県弘前市 | ファッション学ぶ高校生の「甲子園」 | 吉澤佳苗 |
| 8 | 長野県大町市 | 北アルプス山麓で全国初の囲碁村づくり | 西條哲也 |
| 10 | 鳥取県 | 「手話の聖地」ではじける熱い想い | 米澤 章 |
| 12 | 副基調論文 | 人間活動の原点ゆらす体験を意味あるものに | 北川フラム（アトフロント代表） |

【特集編では基調論文、全12事例を全て掲載～特集編のみに掲載される事例は以下の通り】

- | | | |
|-----------|-------------------|----------------|
| ●北海道芽室町 | 「おもてなし」の心で全国大会 | 田川唯史 |
| ●秋田県大仙市 | 野球に燃える親父たちの「甲子園」 | 伊藤優俊 |
| ●山形県天童市 | 老若男女が競う「くちびる美人」 | 山口 宰 |
| ●茨城県龍ケ崎市 | コロッケによるまちおこし | 大竹 昇 |
| ●奈良県大和郡山市 | スポーツになった金魚すくい | 植田早祐美 |
| ●広島県安芸高田市 | 高校生が熱く舞う「神楽甲子園」 | 松田祐生 |
| ●山口県山口市 | 餅は買うものにあらず！ | 椎木耕司 |
| ●愛媛県東温市 | 舞台芸術で豊かな未来を創造 | 田井秀一 |
| ●鹿児島県天城町 | 闘牛文化の継承・発展へ全国サミット | 鹿児島県天城町商工水産観光課 |

レギュラーレポート

- | | | |
|----|----------------------|--|
| 16 | 2019年度 国内調査報告 | 愛知県北名古屋市、奈良県桜井市
寺社を活用した地域拠点づくり |
| 18 | 海外調査報告 | スウェーデン
環境に配慮した持続可能なまちづくり |
| 19 | 海外調査報告 | ニュージーランド
女性が活躍できる地域づくり |
| 20 | “がんばる地域”応援事業 | 愛媛県西予市
皮より中身、皮むき冷凍ミカンで勝負！
濱木由規雄 |
| 22 | 地域づくりの現場から | 認知症キャラバン・メイト南勢地区連絡会 三重県南勢地域
木製パズルをツールに認知症対策
東村 篤 |
| 24 | 令和2年度地方創生フォーラム in 栃木 | いちご一会から始まる未来創生 |
| 26 | リーダー塾修了者エッセー | 養成塾のつながり活かした公民連携
加藤 潤 |
| 27 | 首長の思い | 「まちづくりは人づくり」
山尾順紀（山形県新庄市長） |

グラビア

- | | | |
|----|----------|----------|
| 28 | 都道府県漫遊 | 【北海道】 |
| 表3 | 手前みそですが… | 【佐賀県嬉野市】 |



セーリング
ワールドカップシリーズ
江の島大会 2019

問い合わせ先
藤沢市東京オリンピック・パラリンピック
開催準備室（0466・50・2020）
（写真提供は神奈川県、左は藤沢市）

問い合わせ先
藤沢市東京オリンピック・パラリンピック
開催準備室（0466・50・2020）
（写真提供は神奈川県、左は藤沢市）

神奈川県藤沢市は、東京2020オリンピック
競技大会セーリング競技の開催会場です。同
大会は来夏に延期されましたが、市ではカウ
ントダウンイベントや、海外セーリング選手と市
内小中学校の児童・生徒との交流事業など、様々
な形で気運醸成を図ってきました。
大会時には1000人近くの「シティキャス
トフジサワ」（都市ボランティア）の方が活躍
予定です。また、市民参加型の大会実現に向け
て、藤沢市独自の事業「2020応援団 藤沢
ビッグウェーブ」を立ち上げ、メールマガジン
などによる情報発信を行ったり、大会に向けて
まちを盛り上げていく企画を市民から募集し
、その実現をサポートしたりと、様々な取り組み
を進めてきました。
藤沢市では、セーリング競技以外のスポーツ
も盛り上げていきます。来夏には、ポルトガル
共和国やエルサルバドル共和国などの選手団
が、市内善行にある県立スポーツセンターを拠
点に、事前キャンプを実施予定です。今後も東
京2020大会の成功に向けて準備を進めてい
きます。

東京2020大会セーリング競技会場 江の島

表紙



若者が活躍する秋田の創生を目指して

秋田県知事 ● 佐竹 敬久

秋田の夏と言えば、国重要民俗文化財に指定されている「竿燈」「花輪ばやし」「西馬音内盆踊り」をはじめとするお祭りや伝統行事が県内各地で開催され、例年多くの観光客で賑わう季節であります。今夏は新型コロナウイルス感染症の拡大により、その多くが中止せざるを得ない状況となり、非常に寂しさを感じております。

感染症の一日も早い収束を願い、来年こそは、多くの方々にお出でいただき、美しい自然や伝統文化といった秋田の魅力に触れていただきたいと思います。

さて、国難とも言うべき今回の新型コロナウイルス禍は、東京圏一極集中の負の側面を改めて浮き彫りにしました。

東京と地方の往来の制限や、東京の機能停止は、日本全体の活動停止に直結し、本県においても、大都市に集中しているメンテナンステクニクス技術者などの往来が制限されたことで、工場の稼働停止等を余儀なくされた企業もできております。

このような中で、「まち・ひと・しごと戦略」に基づく地方創生の第2期の取り組みがスタートしています。国では、第1期の取り組みの検証として、産業面に関しては一定の成果があったものの、一極集中の是正については、東京圏への転入超過が、むしろ増加傾向にあり、さらなる取り組みが必要としています。

東京圏一極集中は、産業振興や国土整備など広範な分野に影響を及ぼすとともに、今後の感染症や自然災害への備えという国家的な危機管理の見地からも抜本的な改革が必要であることから、地方への産業再配置や人材の還流、リモートワーク等新しい働き方に対応した地方の通信インフラの整備など、国には、人口バランスの是正に向けた思い切った政策を期待したいと思います。

一方、私たち地方においても、今般の感染拡大をきっかけとする人々の意識を含めた社会情勢の変化をしっかりと見極め、人材誘致などの新たな視点も踏まえ、これ

まで以上に地方創生の取り組みを強化していく必要があります。

本県では、これまでの取り組みにより、輸送機産業の集積や大規模風力発電の事業化のほか、農業産出額の伸びが全国トップクラスになるなど、新たな成果が着実に現れてきており、また、人口減少対策については、幅広い移住促進策等により、社会減の縮小に向けた改善の傾向が見え始めてきています。

こうした中、私が今後の秋田の創生を進める上で重要視していることの一つは若者の活躍です。

いつの時代にあっても、現状を打破し、新しい扉を開いていくのは若者です。人口減少や高齢化が急速に進んでいる本県において、活力にあふれる地域社会を構築していくためには、世代や地域を越えて大きなパワーやエネルギーをもたらす若者の斬新な発想や大胆な行動力を社会の幅広い分野に取り込んでいくことが不可欠です。

職業をはじめとして様々なものが集中し、チャンスのある東京圏で活躍を目指す若者を、地方に縛りつけるようなことはあってはなりません。近年、本県を仕事や生活の拠点に活躍している若者が増えてきており、新型コロナウイルス感染症収束後の社会経済情勢やいわゆる「新しい生活様式」の定着によるライフスタイルの変化により、この傾向は拡大していくものと考えています。

こうした状況の変化を捉えながら、「第2期あきた未来総合戦略」に基づき、自らの未来、秋田の未来を切り拓こうとする情熱を持ちチャレンジする若者を積極的に応援するなどの「人」への投資のほか、「稼ぐ力」「健康・安全・安心」への投資という三つの視点を基本に据え、人口減少対策や、経済が好循環する構造への転換を進めることにより、県民、特に若者がそれぞれの能力を発揮して生き生きと活躍し、将来に夢を持てる秋田の創生の実現に向け取り組んでまいります。

イベントを通じた

地域資源の創造と経営資源の調達

—仲間を集める新たな活性化モデルへの期待—

はじめに

「日本唯一」と「日本一」は似ているようで、少し異なるニュアンスを持っています。「日本唯一」が孤高の存在であるのに対し、「日本一」の後ろには同志や仲間が控えています。競い合うからこそ一番もいれば、ビリもいるわけです。「日本唯一」は絶対的な差別化で、「日本一」は相対的な差別化という言い方もできるかもしれませんが。

ランキング形式のイベントはときに多くの人を集めます。ご当地グルメによる地域おこしの祭典である「B-1グランプリ」やアイドルグループの総選挙などがその代表例です。それに対して、本号で紹介されている事例は、決してメジャーではないけれども、知恵を絞って地域自慢のために立ち上げられたイベントです。こなれない呼び名

で恐縮ですが、とりあえずは「地域資源訴求型ランキング・イベント」と名付けてみます。「地域資源訴求型ランキング・イベント」に求められる要素は、地域資源のアピールの場であること、順位付けすること、定期的なイベントとして開催されることの三つです。

政治学を専門とする上田道明氏（佛教大学）は論文の中で、地域資源の活用を巡っては、「売り出すべき資源がない」と「売り出すための元手（資金）やスキルがない」という「2つの『ない』」が阻害要因となることが多いと指摘しています（上田道明「『食のまちおこし』が示唆する地域活性化のヒント」『佛教大学社会学部論集』56号、2003年、79頁）。前者は地域資源の有無の問題であり、後者は経営資源（ヒト、モノ、カネ、情報）の多寡の問題です。内発的に地域活性化を図るためには、地域資源を発見（創造）し、その



宮城学院女子大学教授

● 大谷 尚之

筆者プロフィール

大谷 尚之氏

（おおたに・なおゆき）

宮城学院女子大学現代ビジネス学部教授

1973年宮城県生まれ。慶應義塾大学環境情報学部卒業、東北大学大学院農学研究科博士前期課程修了。博士（経営学）。宇都宮大学、愛媛大学の教員を経て現職。専門は地域マーケティング論。主な著書として、「産地組織のマネジメントー『コミュニティ』と『リーダー』が創り出す新たな地域農業ー」（東北大学出版会、2009年、単著）、「コンテンツが拓く地域の可能性ーコンテンツ製作者・地域社会・ファンの三方良しをかなえるアニメ聖地巡礼ー」（同文館出版、2018年、共著）などがある。

地域資源を核として各種の経営資源を組み合わせ、持続的に活動を展開する必要があるのです。

地域資源と経営資源の二つの側面から、「地域資源訴求型ランキング・イベント」の特徴について考えてみましょう。イベントを企画する時点で、売り出したい地域資源は既に見つかっています。そして、イベントを開催する時点で、最低限の経営資源はそろっています。そうすると、イベント開催の効果と持続性が次の問題になるのだろうと思います。そこで本稿では、二つの事例を手がかりとしてこの問題を考えてみたいと思います。

ダルメイン世界マーマレード アワード&フェスティバル日本大会

松山市から南西に約50^{キロ}、九州に向かって突き出た佐田岬半島の付け根に位置する愛媛県八幡浜市は、日本有数のみかんの産地です。温州みかんの生産量は県全体の約4割を占め、市内の「真穴」「川上」「日の丸」といった産地ブランド（共選組織）は全国最高レベルの評価を受けています。

2019年5月、八幡浜市においてマーマレードの大規模な品評会が開催されました。「ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会」（以下「マーマレードアワード日本大会」と表記）です。「ダルメイン（Dalemain）」とは、英国湖水地方のペンリス市にある邸宅です。ダルメインの当主夫人であるジェーン・ヘーゼル・マコッシュ氏が、屋敷に古くから伝わるマーマレードのレシピを発見したことがきっかけとなり、2006年、「Dalemain Marmalade Award」（以下「英国マーマレードアワード」と表記）という

マーマレードの品評会がスタートしました。現在では、世界約40カ国から3000点以上のマーマレードが出品されるそうです。また、品評会に合わせて、まちをあげてのフェスティバルが開催されます。

英国マーマレードアワード（職人の部）において、八幡浜市在住の國分美由紀氏が出品したマーマレードが2017・2019年に3年連続で金賞を受賞しました（写真1）。主催者であるジェーン・ヘーゼル・マコッシュ氏は、國分氏をはじめとする日本人の出品作の質の高さや、原料として使用されている柑橘^{かんきつ}の種類の豊富さに感心し、日本大会の開催を検討します。その意向を國分氏から聞いた八幡浜市は大会の誘致に動きまわります。そして、在英日本大使館の協力や市長・市職員の努力により2019・2021年の3回にわたるマーマレードアワード日本大会の誘致に成功しました。

2019年の大会は、5月12・19日に八幡浜市内の会場で各種のイベントと併せて開催され、2万人以上の来場者を集めました。品評会には、海外と42都道府県の712人から1614の出品があり、プロの部とアマチュアの部に分けて審査が行われました（図表1、写真2）。審査を担当したのは、英国大会の審査員2人と、落合務氏や陳建一氏、鎧塚俊彦氏などの有名料理人・有名パティシエを含む全10人です。

大会の誘致を契機として、八幡浜市は「マーマレードのまち」に向けて動きだしました。昨年は、大会の主催者や審査員を地域ぐるみで迎え、マーマレード教室やトークショーなどを通じて交流を

図表1 ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会（2019年）の出品状況

プロの部（応募者数148名）		アマチュアの部（応募者数564名）	
カテゴリー	出品数	カテゴリー	出品数
かんきつ1種マーマレード	205	かんきつ1種マーマレード	300
複数かんきつのマーマレード	37	複数かんきつのマーマレード	122
ミックス・マーマレード	99	ミックス・マーマレード	181
合計	341	子供のマーマレード	16
		高校生のマーマレード	27
		シニアのマーマレード	69
		男性のマーマレード	67
		ファミリーのマーマレード	24
		自家製のマーマレード	177
		愛媛産のマーマレード	139
		黒いマーマレード	97
		料理に合うマーマレード	54
		合計	1,273

資料：八幡浜市産業建設部農林課 世界マーマレード大会推進室



写真2 出品作が並ぶ様子
画像提供：八幡浜市産業建設部農林課 世界マーマレード大会推進室



写真1 英国マーマレードアワードで金賞を獲得した國分氏のマーマレード（瓶の中に見えるハートはライムの皮）
画像提供：國分美由紀氏

深めました。八幡浜市在住者の出品数は253品（全体の約16%）に上りました。また、大会のきっかけを作った國分美由紀氏は2019年12月に

一般社団法人JAPANマーメイド協会を設立し、マーメイドの普及拡大に取り組んでいます。

この事例のポイントは、大会をきっかけとして地域全体がマーメイドに関心を向けるようになった点です。マーメイドアワード日本大会は、専門家とのネットワークづくり、イベント開催やマーメイド製造に関するノウハウの獲得といった点で大きな役割を果たしました。

残念なことに、2020年5月に開催予定だった2回目のマーメイドアワード日本大会は新型コロナウイルス感染症の影響により中止となりました。しかし、2021年大会に続き、2022年大会も八幡浜市で開催することが決定しています。八幡浜市は農林課に世界マーメイド大会推進室を設置して事務局機能を整えており、今後の継続的なイベント開催が期待されます。

らき☆すた神輿

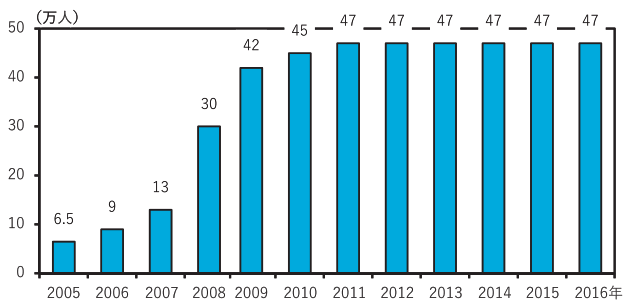
ランキングの要素はないのですが、地域イベントの興味深い事例として埼玉県久喜市鷺宮（旧鷺宮町）の土師祭（はじさい）を紹介します。埼玉県の北東部に位置する鷺宮は、アニメ「らき☆すた」の舞台のモデルの一つであり、「アニメ聖地」の先駆けとして知られています。「らき☆すた」は、女子高生4人のありふれた日常生活を描いた作品です。アニメ版では、主要キャラクターの双子の姉妹は、鷺宮神社をモデルとする「鷹宮神社」の神主の娘で、神社境内で暮らしているという設定がなされています。鷺宮神社は一説には関東最古ともいわれる由緒ある神社です。

2007年4～9月にアニメ「らき☆すた」が放送されると、ロケ地を知った多くのファンが鷺宮神社を訪れるようになりました。その後の詳細については省略しますが、地元商工会が「らき☆すた」の版權元である角川書店とコンタクトをとり、イベントの開催やオリジナルグッズの開発に積極的に取り組みました（詳しくは、大谷ほか「コンテンツが拓く地域の可能性」同文館出版、第4章などをご参照ください）。それにより、地元住民と「らき☆すた」ファンの交流が進みました。鷺宮神社の初詣客は、「らき☆すた」放送前の13万人から放送翌年には30万人へと急増し、その後も47万人まで増加しています（図表2）。

本号のテーマに関連して興味深いのが「らき☆すた神輿」です。鷺宮神社境内に収蔵されている「千貫神輿」の渡御行事である土師祭が毎年9月に開催されます（2018年以降は事情により開催されていません）。2008年夏、祭りの主催者からの働きかけにより、地元住民と「らき☆すた」ファンが協力して「らき☆すた神輿」を製作しました。「らき☆すた」のキャラクターが描かれた布で櫓（やぐら）を覆い、内側から照明で照らす形式の神輿です（写真3）。

「らき☆すた神輿」は、全国各地から集まった100人以上の「らき☆すた」ファンによって担がれ、祭りを大いに盛り上げました。「らき☆すた神輿」をきっかけとして、町内における「らき☆すた」ファンに対する評価が高まったといわれています。その後、2017年まで毎年「らき☆すた神輿」の渡御が行われ、2018年からは地域内の別の祭典で担がれるようになりました。2

図表2 鷺宮神社の初詣客数



資料：関係者への聞き取り調査により作成

注：初詣客数は関係者による概算。2007年の客数を9万人とする資料もある



写真3 らき☆すた神輿
画像提供：久喜市商工会鷺宮支所

014年6月には、「らき☆すた神輿準備会」が発足し、ファンが主体となって神輿の運営を担う体制となっています。

この事例のポイントは、住民の配慮によって、地域外のアニメファンが祭典に参加する機会を得、それにより地域に新たな文化資源が生まれた点です。近年は、千貫神輿と「らき☆すた神輿」



写真4 土師祭での「らき☆すた神輿」と千貫神輿の共演（奥が「らき☆すた神輿」）
画像提供：久喜市商工会鷺宮支所

の共演が土師祭のクライマックスとなっていました（写真4）。住民のほとんどは別に「らき☆すた」が好きだったわけではありせん。しかし、偏見を持たずに「らき☆すた」

た」ファンを受け入れ、交流を深めました。その最大の象徴が、「らき☆すた神輿」です。テレビアニメ放送から10年以上が経過した現在でも、ファンと地域住民との関係は続いています。

地域イベントを通じた経営資源の調達

身も蓋もない言い方ですが、経営資源の代表的要素は、「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」だとされます。一般に、これらの資源は大企業や都会に集まっています。しかし、乏しいからといって何もしないわけにはいきません。本稿で紹介した二つの事例からもわかるように、知恵を絞ったイベントは地域外から経営資源を調達する手段になりえます。

鷺宮では、「らき☆すた」の舞台のモデルになったことをきっかけに、地域住民と「らき☆すた」

ファンが交流を深め、「らき☆すた神輿」の製作と祭典への参加を実現しました。神社や神輿という既存の地域資源（モノ）を核に、「らき☆すた」ファンのマンパワー（ヒト）と彼らのノウハウを活用し、継続的にイベントを盛り上げることに成功しました。

八幡浜市のマーマレードアワード日本大会は、ランキング・イベントの特徴を明確に表しています。品評会形式のイベントを開催したことにより、国内外の著名な審査員と、全国各地から700人以上の出品者を集めることに成功しました。審査があるからこそ、入賞を目指して真剣に応募するわけです。八幡浜市は、マーマレードアワード日本大会の開催を通して、柑橘類という全国屈指の地域資源（モノ）を核に、地域内外の専門家や料理愛好家（ヒト）と彼・彼女らのノウハウ（情報）を集めたといえます。イベント開催は、地域住民のマーマレードに対する関心も高めつつあり、将来的には地域資源としてのヒトやノウハウの蓄積を期待することができそうです。そのためにもイベントの継続開催を目指してほしいものです。

二つの事例を踏まえて、「地域資源訴求型ランキング・イベント」を地域活性化につなげるための筋道を仮説的に示してみます。（地域資源の発見・創造→イベント化→経営資源（ヒト、モノ、カネ、情報）の調達・活用→地域文化の創造）という流れです。

地域資源にちなんだイベントの開催を通じて、既存の地域資源と地域内外の経営資源を組み合わせるができます。継続的なイベント開催により、地域資源のアピールと経営資源の蓄積を期待

することができそうです。そして、住民の理解が深まり、地域の生活文化として定着させることができれば、地域ブランド力の向上が視野に入ってくるものと思います。「地域資源訴求型ランキング・イベント」は短期的な経済効果の追求よりも、中長期的な経営資源の蓄積と地域文化の醸成を目標とした方がその力を発揮するのではないかと考えています。

おわりに

繰り返になりますが、本号が取り上げる事例はいくつかの可能性を秘めています。第一に、地域資源の発見と経営資源の調達を同時に実現する可能性です。これは、冒頭に引用した「2つの『ない』」を克服する手がかりになります。第二に、競い合うことの効用です。良い競争は努力を促し、優れた者から学ぶことを可能にします。一番もじりも、同じ目標に向かう同志には違いありません。地域を越えた横の展開を期待したいところです。

人口減少や財政のひっ迫が進む中で、地域の自立が求められています。かつては、「地域の自立」や「地域主義」というと、いささか教条的で孤立したイメージがありました。しかし現代では、リアルとバーチャルの交流を前提にもう少し緩く構えた方がうまくいくのではないのでしょうか。各地が地域資源を掘り起こして魅力的なイベントを開催すれば、交流が進みます。その過程で、経営資源を蓄積したり、地域文化を醸成したりすることができれば、それは新しい地域活性化のモデルを示したことになるのではないかと考えています。

キラリと光る
わがまち自慢の全国大会

青森県弘前市

ファッション学ぶ高校生の「甲子園」 —流行に敏感な東北の地・弘前で20年—



弘前商工会議所ファッション
甲子園実行委員会事務局

・吉澤 佳苗

ファッション甲子園とは

2000年2月に青森県が策定した「ファッション振興ビジョン」に基づき、21世紀のファッションを担う人づくりを目的に高校生を対象にしたファッションデザインコンテストが実施されました。初年度は北東北3県（青森県、岩手県、秋田県）を対象に開催したところ、非常に大きな反響があったことを受け、対象を全国に拡大して2001年に「全国高等学校ファッションデザイン選手権大会」（通称「ファッション甲子園」）がスタートしました。2004年12月には事務局を青森県庁から弘前商工会議所に移し、弘前商工会議所と青森県、弘前市、青森県アパレル工業会で実行委員会を組織してファッション甲子園を運営しています。

ファッション甲子園は、その名の通りファッション性とデザイン性を競うコンテストですが、出場しているのはデザイン系学科の生徒ばかりでは

ありません。普通高校、工業高校、総合高校、農業高校、特別支援学校まで幅広い層の生徒が参加しています。

コンテストはデザイン画による1次審査を行い、これを通してチームは実際に衣装を制作し、大勢の観客の前でのファッションショー形式による最終審査で上位を競います。1次審査には毎年約3000枚の応募があります。デザイン画であっても、衣装を仕立てるときに使用する生地イメージをデザインに落とし込んでいる作品が多く、高校生のレベルの高さを感じています。

◆◆◆
どうして弘前で？

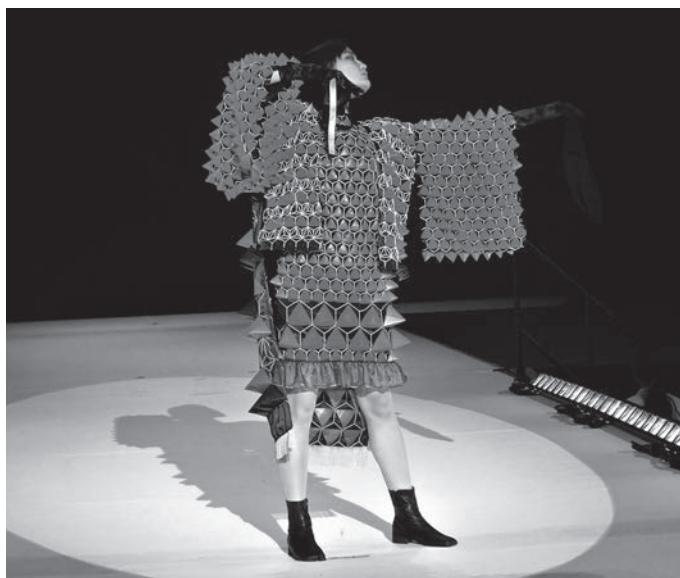
ファッション甲子園は昨年の開催で19回目を迎えました。初対面の人には100%聞かれるのが「どうして青森・弘前でファッションなのか」という質問です。弘前市は江戸時代に津軽藩の城下町として栄え、第2次世界大戦後は東北初の百貨店「かくは宮川」がオープンする（19

78年に閉店）など、東北圏内では流行に敏感な気質を持ったファッション感覚の高い街です。弘前市内および周辺一帯の津軽地方には高い技術力を持つ縫製工場が数多く立地し、国内のみならず国際的なコレクションで着用する衣装を手掛けている工場もあります。こうした土地柄もあり、2000年当時の青森県知事がファッションデザインコンテストの開催を決めた際に弘前の地が選ばれました。

◆◆◆
地域に根差した大会を目指して

北東北3県大会も含めると20年間、弘前市でファッション甲子園を開催しています。「継続は力なり」ということわざがありますが、回を重ねるごとに大会の認知度は上がり、今では毎年のように最終審査会の会場へ足を運んでくれる弘前市民や青森県民が大勢います。昨年開催されたファッション甲子園2019最終審査会で来場者にアンケート調査をしたところ、約3割が3回以上ファッション甲子園を観覧したことがあると回答しました。観覧された人からは「今年も良かったよ！」「また来年楽しみにしているよ！」「と声を掛けてもらうこともあり、大変励みにしています。

しかし、一方では「弘前市民だけど娘が出場することになって初めて知った」「会場までのタクシーの中でファッション甲子園の話をしたが、運転手は開催を知らないようだった」という声もあり、周知・PR面ではまだまだ課題が山積しています。ファッション甲子園実行委員会では、弘前市民、青森県民へのPRを目的に、弘前市内や周辺地域



ファッション甲子園 2019 優勝作品（岡山県立岡山南高校）

の商業施設で最終審査会に出場する全作品のデザイン画を展示しています。また5年前からは、弘前市を中心に私鉄路線を運営する鉄道会社の協力を得て、電車の車両内でもデザイン画の展示を行っています。

さらに、ファッション業界への興味・関心を高めてもらうため、青森県内の学生や一般の方を対象にした「ファッションのお仕事最前線セミナー」も毎年開催しています。この事業は、普段なかなか接する機会のないファッション業界で活躍している人を講師に迎え、「ファッション業界にはどのような仕事があるのか」という基本的な内容をはじめ、「ファッション業界の現状」「関連企業の求める人材」などについて講演してもらっています。ファッション業界を志す若い人材に対して、



ファッションのお仕事最前線セミナーの様子

より現実的な目標を設定するきっかけづくりとして、これまで15回（年1回）開催しました。

講師を務めるのは、ファッションデザイナーの他にも、素材にこだわった服作りをしている会社や、近年進化が目覚ましい制作過程デジタル化を進めるリーディングカンパニーの代表など、多岐にわたっています。参加した学生からは、「将来の視野が広がった」「ファッションといってもいろいろなか職種があることを知った」というコメントをもらうなど、毎回好評を得ています。

◆◆◆ 今後の展望

今年度、ファッション甲子園は第20回という節目の大会になる予定でした。しかし、世界的に流



全国から応募のあったデザイン画

行が拡大している新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で中止が決定しています。

これまで約20年にわたりファッション甲子園を開催し、過去の出場者の中には現在デザイナーとして活躍するOGや、ファッション甲子園の出場を契機に服飾の道へ進み、夢を実現したOGもいます。また、ファッション甲子園の優勝校には副賞としてファッションの本場・パリでの研修旅行がプレゼントされ、ファッション業界をより身近に感じてもらう機会も創出しています。

残念ながら、今年度のファッション甲子園は中止になってしまいましたが、今後もファッションの世界を志す高校生を応援し、高校生の夢を実現するための一助を担う大会となるように邁進（まいじん）してまいります。

北アルプス山麓で

全国初の囲碁村づくり

— 知事杯・市長杯目指し2000人参戦 —

大町市総務部企画財政課
企画調整係 主任

・ 西條 哲也

きっかけは雑誌のコラム

大町市は、長野県の北西部、松本平の北に位置し、西部一帯に峻険な北アルプス山岳を連ねています。市街地の標高は700m以上あり。典型的な内陸性の気候で、北アルプスの山々を映す仁科三湖や清冽な河川など、四季折々の変化に富んだ美しく豊かな自然環境に恵まれています。立山黒部アルペンルートや国営アルプスあづみの公園をはじめ多くの観光資源も有し、年間300万人を超える観光客が訪れる山岳観光都市です。

大町市では、平成5年度に「アルプス囲碁村構想」を提唱し、日本棋院の全面的なバックアップをいただきながら、全国初の試みとなる「囲碁村づくり」に取り組んでいます。現在では、全国の囲碁ファンの中で「アルプス囲碁村」大町市として定着していますが、著名なプロ棋士を輩出し

たわけでも、碁石や碁盤などの産地でもない大町市が、なぜ囲碁によるまちづくりに取り組むことになったのか、その経緯について紹介したいと思います。

アルプス囲碁村構想が提唱された当時は、全国各地の自治体において、「ふるさと創生1億円事業」を活用し、温泉開発や話題となるミニユメント制作など「特色のあるまちづくり」「個性のあるまちづくり」「ユニークなまちづくり」を目指した取り組みが盛んでした。

大町市でも、豊かな自然環境を活用した「個性あるまちづくり」「心豊かに生きるまちづくり」を模索する中、ある囲碁雑誌のコラムが目にとまりました。そこには「首都圏から3時間程度で行ける宿泊施設や温泉がある観光資源の豊かな地で、全国の囲碁ファンが集い、好きなだけ碁が打てる夢のような場所が欲しい」と書かれていました。北アルプスの壮大な景観に加え、黒部ダムや

仁科三湖、温泉施設などの豊富な観光資源がある大町市は、まさに囲碁ファンが求める夢のような場所にぴったりと、日本棋院に名乗りを上げたことが始まりです。

囲碁は、誰にでも楽しめる簡単なルールながら奥行きのある深い知的なゲームです。しかも、単にゲームとしてだけでなく、礼に始まり礼に終わるといわれる囲碁は、人間形成や人材育成に非常に役立つとされています。大町市も「まちづくりは人づくりから」という視点に立ち、「囲碁を学ぶ」のでなく「囲碁に学ぶ、囲碁で学ぶ」という考え方をもとに、市内の幼稚園・保育園や小学校を中心に行われる普及啓発活動を通して人づくりに精力的に取り組んでいます。

アルプス囲碁村まつりの開催

「パチッ、パチッ」。普段はスポーツを楽しむ声が響く総合体育館の大アリーナに、老若男女が碁石を打つ音が。

3000m級の山々が連なる北アルプスの山肌に特徴的な雪形が現れ、山麓の木々には青々とした若葉が繁る5月下旬、大町市では春の風物詩となっている「アルプス囲碁村まつり」の幕が上がります。

このイベントは、温泉宿に宿泊し、憧れのプロ棋士から指導碁が受けられる前夜祭と、長野県知事杯・大町市長杯を目指してクラス別で対戦する囲碁大会で構成されています。平成8年、世界アマチュア囲碁選手権戦が大町市で行われたことを記念して第1回大会を開催し、回を重ねて昨年第



白熱したプロ棋士による指導碁



憧れのプロ棋士と記念撮影



プロ棋士による親子囲碁入門教室

19回を迎えました。

前夜祭では、毎年参加していただく二十四世本因坊秀芳先生をはじめとする総勢8人のプロ棋士による指導碁を行います。子どもから中高年までの愛好者を相手に熱心な指導が行われ、白熱するあまり終了時間を超えても指導が続けられるほどでした。

その後の懇親会では、アトラクションの「二十四世本因坊秀芳からの挑戦状」(詰碁)に大勢の方が参加。「全問正解者はアマ5〜6段に相当する」(秀芳先生)という難易度の高い挑戦状となりましたが、予想以上に当選者は多く、参加者のレベルの高さがうかがえました。見事に全問正解

した23人の中から抽選で10人に、参加プロ棋士全員のサイン色紙や、地元の銘菓「雷鳥の里」が秀芳先生から手渡されました。

普段は経験できないプロ棋士との交流に加え、1年ぶりに再会した囲碁村の仲間と大町市の銘酒に舌鼓を打ち、北アルプスの麓の天然温泉で癒やされるひとときは、まさに至福の時間となりました。

翌日は、市総合体育館で「長野県知事杯・大町市長杯争奪囲碁大会」が開催され、首都圏はもとより遠くは福岡県や広島県など全国各地から約200人が参加する中、地元・大町岳陽高校の生徒が選手宣誓を行い、各階級に分かれて熱戦を繰り

広げました。

また、囲碁普及の試みとして、市内の年長児と保護者を対象に、プロ棋士による囲碁入門教室を開催したところ、10組の親子が参加しプロ棋士の温かい指導を受けながら、熱心に囲碁を学んでいました。こうした機会を通じて、さらに若い囲碁愛好者が増えることを期待しています。

交流の輪のさらなる拡大へ

近年、アルプス囲碁村まつり参加者は、各地で開催される様々な囲碁大会の影響や、愛好者の高齢化に伴い、年々減少傾向にあります。また、新

型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、人と人との間の距離を保つ取り組みも、膝を突き合わせて碁石を打つ囲碁の世界にとって少なからず影響があると思います。しかしながら、人と人とのつながりを大切にする囲碁の普及活動を通じ、今後も「まちづくりの原点は人づくり」との認識のもと、さらなる交流の輪の拡大につなげるべく、アルプス囲碁村の活動を推進してまいります。

「手話の聖地」ではじける熱い想い —全国の高校生が手話パフォーマンスに挑戦—

鳥取県福祉保健部ささえあい福祉局
障がい福祉課社会参加推進室
(手話パフォーマンス甲子園実行委員会事務局) 係長

● 米澤 章

手話は言語だ

手話は言語だ。7年前、この小さな鳥取県で全国に先駆けて、手話を言語として認め、ろう者やその関係者にとって大きな意味を持つ「鳥取県手話言語条例」が制定された。

同条例では、県における手話の普及に関して基本理念を定め、県、市町村、県民および事業者の責務や役割を明らかにし、ろう者の人権が尊重され、ろう者とうる者以外の者がお互いを理解し共生することができる社会を築くことを目的としている。

本県が全国で初めて手話言語条例を制定したことをきっかけに、今では300を超える自治体で制定され、「手話は言語」という認識が全国に広がってきている。

ただ、実際に多くの方に手話を広めていくためにはどうするべきか。この取り組みをさらに加速させるために、「手話の聖地」となった鳥取県で

何ができるのだろうか。

もうひとつの「甲子園」

手話を広めるために必要なこと。そのひとつは、若い人いかに手話を浸透させるかだ。若い人が情熱を持ち、真剣に取り組むための目標があれば、手話を浸透させることができるのではないか。その目標とすべく、鳥取県で全国の高校生が集まる手話パフォーマンスの大会を開催しよう！それが「全国高校生手話パフォーマンス甲子園」だ。

今年で第7回目となるこの大会には、全国各地から多くの学校が挑戦している。中には「この大会に出場するために〇〇高校に入った」という声もある。私が思っていた以上に、高校生にとっては大きな目標の大会になっており、高校生が目指すもうひとつの「甲子園」として定着している。

全国高校生手話パフォーマンス甲子園はその名のとおり、手話言語を使ったパフォーマンスを披露する大会だ。ダンスや演劇に限らず、歌唱、漫

才、コントなど、パフォーマンスであればジャンルを問わない。参加する高校生が楽しみ、情熱を持って取り組めるものであれば何でもいい。

実際に昨年度の大会では、ダンス、演劇、ポエム、歌唱、コントなど演技内容は多岐に及んだ。どのチームのパフォーマンスも真剣そのもので、この大会に懸けてきた思いが表現された素晴らしいものだった。最後には順位がついてしまうものの、本大会に出場したチーム、予選に参加したチーム全てが輝いていた。

それぞれが汗や涙を流して努力した結晶として披露されるパフォーマンスは、観覧者の心を動かし、感動を呼ぶ。同世代の高校生はもちろん、世代を超え、手話のことを考えるきっかけにもなっている。

また、この大会を通じた交流は、高校生たちの成長にもつながっている。予選参加チームや本大会出場チームの中には、聴覚障がい者を対象とする特別支援学校とその他の学校で構成する合同チームがある。聞こえる人、聞こえない人が一緒になって日々努力し、一つのパフォーマンスをつくり上げていく。お互いを理解し、尊重し合うことで次の一歩につながる。

中には、大会が終わってから、もっとうる者のことを理解したい、交流したいと勉強を続けている生徒もいると聞く。そういった先輩たちの姿を見た後輩たちにその気持ちが伝わり、また大会を目指して努力する。全国高校生手話パフォーマンス甲子園をきっかけとして様々なつながりが生まれ、手話の裾野が若い人たちに広がっていると感じる。



【優勝】 真和志高等学校パフォーマンス



【準優勝】 奈良県立ろう学校パフォーマンス



【日本財団賞】 米子東高等学校パフォーマンス

高校生主体の大会運営

この大会は「手話言語」によるパフォーマンスに焦点を当てた大会で、その主役はもちろん高校生だ。

パフォーマンスを披露する高校生のほかに、応援サポーターとして広報を中心に大会を盛り上げる高校生、自分たちが作った商品をマルシェで販売する高校生、ボランティアとして大会の運営を補助する高校生などの参加を促し、高校生主体の大会運営を目指している。

昨年度からは、司会者の1人を高校生に担ってもらっている。この高校生は1から手話を勉強し、

ペアの司会者にフォローをしてもらいながらも立派にやり切った。この大会に関わってくれた高校生全てが、本当に一生懸命に取り組んでくれたことが大会の成功につながっている。

大会の力になりたいと高校生が主体となって動

いてくれることで、同年代の学生やその保護者など多くの世代の心に響く。その純粋な気持ちに伝えられるよう、我々はこれまで参加したことのない地域の学校にも積極的に参加を促し、全国に手話の輪を広げていくための努力をする必要がある。

最後に

今般の新型コロナウイルスの影響で、高校生たちも行動を制限され、全国的な活躍の場を奪われている。特に最後の大会に向け努力を重ねてきていた最終学年の生徒の気持ちを考えると、本当に胸が締め付けられる思いだ。

この全国高校生手話パフォーマンス甲子園についても新型コロナウイルスの影響を受け、計画どおりに進めることができない。だが、この大会に出場しようと努力してきた生徒の気持ちに応えることができるよう、状況に応じた可能な形で開催する方針だ。高校生たちが青春を懸けて努力した成果を披露する場となるよう、関係者と力を合わせて大会を成功させたい。

キラリと光る
わがまち自慢の全国大会

人間活動の原点ゆらす体験を

意味あるものに

—ふるさとイベントを直撃したコロナ禍—



アートフロントギャラリー代表 ● 北川 フラム

地域おこしの起爆剤となるイベント

さまざまなタイプの美術家が地域に入り、地域の歴史、生活、祭、儀式、食事、道具、産業などの特色を生かして作品をつくる、その過程の活動などが中心となって多くの人が集まる芸術祭を、現在5つの地域で行っていますが、それが私の仕事の中心です。地域型、あるいはツアー型芸術祭といわれていて、みんな3年に1回の、つまりトリエンナーレといわれているものです。それぞれ、新潟県十日町市・津南町の「大地の芸術祭」、12の島を会場とする「瀬戸内国際芸術祭」、千葉県市原市の「房総里山芸術祭」はらアート×ミックス、長野県大町市の「北アルプス国際芸術祭」、石川県珠洲市の「奥能登国際芸術祭」です。

私は9年前から地域活性化センター主催の「ふるさとイベント大賞」の審査員をやらせていただ

いていますが、こちらは永年続いている神事や祭り、地域おこしの起爆剤になるべく工夫し頑張ってきたイベントなどが対象になっています。例えば奥能登国際芸術祭では、主として9月と10月に100を超える集落で連日行われている「キリコ祭り」や、そのなかで行われる「ヨバレ」という各家庭での食事のモチベーションも重要な要素として組み込まれていたりもするのですが、このキリコ祭りは2015年のふるさとイベント大賞で総務大臣表彰を受けています。期間と場所が限定され、住民の参加度が高いのがふるさとイベントで、これに対し芸術祭の方は50日以上だし、中間年も小さなプロジェクトをやり、通年化しつつあるというのが二つの違いです。

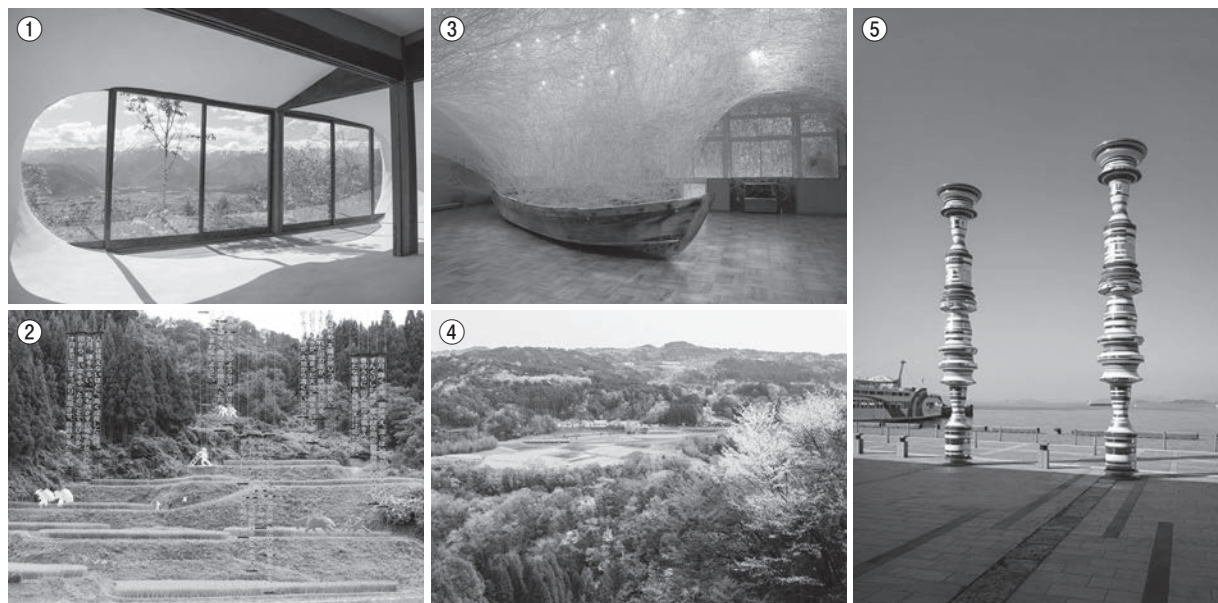
ここで珠洲のキリコ祭りを例にとつて、少し詳しく説明をしてみます。この祭りは「キリコ」と呼ばれる切子灯籠や巨大な行燈の山車を夕方から朝にかけて神社に奉納するというもので、集落総

筆者プロフィール

北川 フラム氏
(きたがわ・ふらむ)

1946年新潟県高田市(現上越市)生まれ。東京芸術大学美術学部卒業。アートフロントギャラリー代表。主なプロデュースとして、「アントニオ・ガウディ展」(1978-79)、アパルトヘイトに反対する動きを草の根的に展開した「アパルトヘイト否!国際美術展」(1988-90)、米軍基地跡地を文化の街に変えた「ファーレ立川アートプロジェクト」(1994)等。地域づくりの実践として、「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」(2000～)、「瀬戸内国際芸術祭」(2010～)等で総合ディレクターをつとめる。2003年フランス芸術文化勲章シュヴァリエ。2006年度芸術選奨文部科学大臣賞。2017年度朝日賞受賞。2018年度文化功労者。2019年イーハトーブ賞。

出の年1回の大行事です。ヨバレという近親者、ご近所さんをお呼びし御膳を出すという風習が今も残っていて、これには誰が顔を出してもよいという素晴らしい習慣があり、私も初めてヨバレに参入した時は「祭りだから」とあたたかくもてなされたよい思い出が残っています。小型のものから16メートルの大きなキリコが5台も出る壮観なものまでいろいろあって、日本でも有数の催事だと思のですが、それでも人口減少によってやめ



①目「信濃大町実景舎」Photo：本郷毅史〈北アルプス国際芸術祭〉 ②イリア&エミリヤ・カバコフ「棚田」Photo：中村 脩〈大地の芸術祭〉
③塩田千春「時を運ぶ船」Photo：中乃波木〈奥能登国際芸術祭〉 ④房総里山芸術祭いちほらアート×ミックス ⑤大巻伸嗣「Liminal Air-core」
Photo：Yasushi Ichikawa〈瀬戸内国際芸術祭〉

ざるをえなくなった地域もあり、いくつかの例外を除けば往時に比べてにぎわいはなくなってきたといわれています。ふるさとイベント大賞はここ

に光をあてました。平成26年度の総務大臣表彰をうけました。

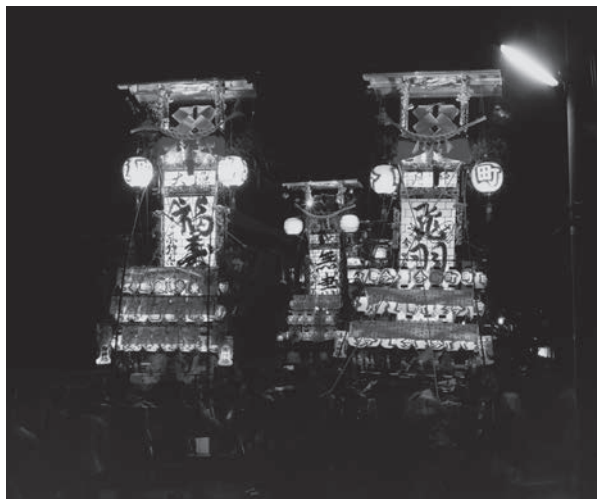
珠洲は人口1万3870人（令和2年6月）、本州では人口最小の市です。昭和25年には3万8157の人口があったのにです。日本海にとび出た奥能半島の先端、暖流と寒流が豊穡の海となり、古くから遣唐使、渤海使が漂着し、出雲から北上する古代人の停泊地、時代が下って、江戸時代には北前船の大切な港、さらに言えば里山が急降下し、海と山がほどよく浸しあう山と海の稔りの地、それが、近現代の労働集約化、効率一辺倒、都市化のなかで、それは東京との交通距離によるものか、一気に衰退してしまっただけ。しかし、少し注意をこらしてみれば、神社、仏閣の数はそれぞれ79社、68ヶ寺と密度は高く、地名、名字の多様性は「鳥翅」、「馬縹町」、「万代呂」、「西法司」、「釈迦院」、「茶院」、「塗師」、「熊主」など読めない字がほとんどというぐらいです。「あえのこと」、「高倉彦神社の早船狂言」、「飯田町燈籠山祭り」の貴重な神事の多さ、つまり、文化の蓄積と層の厚さは日本有数のもので、その本来もつ土地の力を生かそうと、地域、行政あげて芸術祭にとり組もうということになったのです。

コロナ禍で見えた社会の真実

ここでみたように、ふるさとイベント大賞は地域にある永く続いた伝統的な行事

や、近年に地域おこしのために考えられた突出したプロジェクトを顕彰しようと24回続けられてきたものですが、そこにあるのは地域の生業をベースとした総合的な底上げの期待です。決してその場限りの観光ではありません。芸術祭もそういうものとして企画されています。この間、新型コロナウイルス（COVID-19）が世界中に広がり、コロナパンデミックとして、ある意味では、第一次、第二次世界大戦を超える世界的な共通体験となり、今なお、というよりこれから冬にかけていつそう世界をおおう不安をもたらしています。これを書いてる現在でも発表されている限りでも世界の感染者は1018万5374人（7月1日10時00分）、死者は50万3862人（同上）日本でも974人（同上）になっています。これからアフリカ、中南米に一挙に拡大し、北半球でも第2波、第3波が予想されています。3月から自粛や制限が行われてきましたが、この移動、共食、集まり、会話の自由こそ人間が人間であるために獲得してきた大切な活動だったことを思えば、私たちはとてつもない事態におちいっているのです。ここには地域にとって大切な問題が横たわっているといます。

いくつかの現象的なことから考えてみます。まずこの新型コロナウイルスは原始的な自然の領域（野生）が侵蝕され、それらが存在していくための変異が文明社会に入り始めたものとされていますが、これはこの50年間言われ続け、ほとんど壊滅的になった地域環境問題そのものの結果です。またこのウイルスと共存していくには人間にその抗体がある程度なくてはなりません、それ



キリコ祭り

奥能登珠洲で夏より秋に行われているお祭り。
勇壮な巨大キリコが町中を練り歩く幽玄な神事



ヨバレ

キリコ祭りで、各家庭で料理をふるまう
能登独自のもてなし文化

には山野草など土の臭いをもつ食材を幼い頃から
食べていた方がよい、土遊びをした方がよいとい
われています。まさに無菌を絶対視する現在の都

市とは真逆のことです。ここに現在の価値観の致
命的なほとんどが集中していると思われます。私
たちがその一部分である自然とほどよく共存しな
くてはならないのです。

次にこの間移動が制限されたことについてで
す。4月7日の緊急事態宣言が発せられてから各
自の移動、外出、飲食の自粛が促され、公式には
今日（7月7日現在）では国内の交通は自由にな
りましたが、外国とはまだ鎖国状態です。また注
目すべきは田舎の集落では圏外者の流入は断固い
やだという場所が意外に多いことです。これに対
して3密が起りやすい首都圏からの田舎へ脱出
したい人が多いとの報告がされています。またリ
モートワーク歓迎の人たちが多いことも事実でし
た。これはもともと都市には刺激と興奮が多く、
大量の消費ができるという若者にとって数年間の
魅力こそあるが、絶え間ない競争と、とんでもな
い情報の多さとロボットのような生活のなかで非
人間的にならざるを得ないなかで都市脱出願望が
多いことと符牒があっていると納得したわけで、
こんな時こそ田舎は都市を受けいれるチャンスだ
と思っていました。残念ながらそうはならなか
った。観光客は良いけれど、いざとなると困る、
不安がある、不信があるというズレの中に私たち
の社会の真実が見えてきたのです。それは真の意
味で田舎には医療をはじめとしたインフラがない
ことによるものでした。巡り巡って田舎こそ医療
がしっかりしなければ駄目だということになりま
す。今回のコロナ禍のもとで、地域環境をこれ以
上劣化させない、市場、効率第一主義を考え直さ
なくてはならない。地域文化をもっと尊重しなけ

ればいけない、という気持ちを大切に思ってい
く可能性はあります。生命、健康、予防医学、モノ
と人の移動、グリーンエネルギー、文化、教育と
いった根本的なインフラを大切に考える方向に少
しは行くでしょうが、それがボーズに終わらない
ようにしてはならない、私たちはいまだかつ
てないほど生命、人類が自然と接するための方向
での踏み分道にしているのではないのでしょうか。
ふるさとイベントは、その意味で私たちと自然
との里程標のような位置にいるような気がするの
です。

イベントが現代文明に警鐘鳴らす

さて、ふるさとイベント大賞は昨年度では各県
の推薦120件のなかから次のようなものが選ば
れています。

- ・大賞（内閣総理大臣賞）
地獄の谷の鬼火花（北海道登別市）
- ・最優秀賞（総務大臣表彰）
よさこい祭り（高知県高知市）
- ・優秀賞 能登小木港イカす会（石川県能登町）
- ・優秀賞 RENEW（福井県鯖江市）
- ・優秀賞 柳川雛祭りさげもんめぐり
（福岡県柳川市）

- ・ふるさとキラリ賞
狐の夜祭り（新潟県柏崎市）
- ・ふるさとキラリ賞
農村舞台音楽公演（徳島県那賀町）
- ・選考委員特別賞
フェスティビタス ナタリス（長崎県南島原市）

このうちRENEWはもともと全国屈指のものづくり（漆器、眼鏡、和紙、打刃物、箆笥、繊維、焼き物）の集結地である土地が全国にも声をかけて始めた工房巡りのイベントであり、フェスティビタス ナタリスはもともとキリスト教と縁の深い土地でのクリスマスイベントで、土地の歴史と深く結びついたものでした。その他はその名の通り伝統的なものであり全国的に知られたものです。

以上のふるさとイベントに今年は参加しようと楽しみにしていましたが、ほとんどのイベントが中止になりました。それはこの後開催のものを含めて、伝統的な行事は限られた人だけでやるというかたちで終わらざるをえなくなりました。もちろん今年度の表彰も、期間をながくって審査しようということになっていますが、世の中の伝統的な行事が中止になるのは、特にそれを励みとしていた人にとってはつらいことです。年一回の行事は、同時にながい、つらい労働のはてにあったわずかな楽しみだったからです。

ここでふるさとのイベントについて整理しておきます。それは地域の神事および自然、生活と結びついていて、しかもその土地で生きていくための生業のなかから生まれ、同時にその辛苦を昇華するためのものでした。それ故に、自然から離れ、自然と対立するものとしての文明をつくり始めた現代の風潮、社会システムに警鐘を鳴らすものとして、きわめて貴重な意味をもっているのです。今年のコロナパンデミックのなかにいて、それがあります大切なものになっていることがわかりました。人としての移動、会話、共食すらできなく

なっている。これは先に述べたように、人類が共通に体験しているつらいことだけれど、これを意味ある経験としなくてはならないし、ここでしっかりしないと、根本なところで奈落に落ちざるをえないと思うのです。

「食」の大切さ伝える プロジェクトにも注目

もうひとつ注目しておくことがあります。昨年は小木港のイカプロジェクトが選ばれています。近年ますます食プロジェクトの大切さが分かってきました。食はその食材、料理法、もてなし方全体を含んで地域と最も深く、一年中を通してかわっているものです。はれの日の料理だけでなく、食材が豊富でない時期のつましい食事を含めて、地味、気候、共同体の在り方、流通が理解できる。それだけでなく、例えば宮崎の冷や汁を名物にしていく過程で、地域のシステムを改良していく働きもあるのです。私がかかわっている芸術祭でも、当初から食の占める重要性は決定的でした。アートは地域理解の入り口にはなりますが、その芸術祭が行われる土地へのリピーター率が高い理由は食によるところが多い。例えば越後妻有の大地の芸術祭では、地域のお母さん達の料理をふるまう「うぶすなの家」から始まって、もてなしに工夫したお芝居入り会食「北越雪譜」、冬のもてなし料理を集落ごとに催す「雪見御膳」、食材のうまさによって焦点をあてたEAT&ART TARA ROさんによる「ザ キュウリショー」、各地の米の特徴をあきらかにする「ザ おこめショー」などの展開から、今では季節の山野草、野菜の加



「うぶすなの家」ランチ (photo Ayumi Yanagi)
大地の芸術祭（新潟県十日町市）の作品の一つでもある「うぶすなの家」。
古民家を使った焼き物ミュージアムではランチの提供も行っている

工品での、通販を考えた活動もされるようになっていきます。食は地元の人達の活躍のわりあいが多く、なおかつその地で採れた食材をその土地の料理法でその共同体の価値そのものであるもてなし方で迎えるならば、それはあきらかに世界一なのです。

今日のコロナの禍で、多くの人々は自らの生活、社会システム、自然環境についていろいろ考えました。話す、動く、たべるという人間活動の原点がゆらぐ体験をしました。そのこととふるさとのイベントは直接的につながっているものです。この間の体験を意味あるものにしたと切に思ったことです。

寺社を活用した地域拠点づくり — 先進事例を通して役割を検証 —

寺社は元来、地域に根差した歴史・文化の中核を担ってきた。しかし近年は、少子高齢化や地方の過疎化により氏子・檀家は減少、さらに核家族化の進行が寺社との関係の希薄化に拍車をかけ、存続が困難となる寺社が増加している。

こうした社会環境の中、人が集う仕組みづくりに取り組み、地域の活性化に寄与している寺社もある。私たちはその活動に注目し、先進事例を通して寺社がまちづくり・地域づくりでどのような役割を果たせるのかを検証した。

平田寺

寺社が自ら

取り組んでいる事例

愛知県北名古屋市にある平田寺は、「開かれたお寺」として宗派、宗教の垣根を超えて誰もが気軽に集い、学び、支え合う場とする活動を行っている。こうした活動の背景には、「寺社は古くから人々が集い、行き交う地域コミュニティの中心だった」という住職の思いがある。

活動の中心となるのは、毎月定期で開催している「こども食堂」だ。子どもは無料で、大人は任意の金額を寄付する。誰でも気軽に食事ができ、食事作りにはその趣旨に賛同する人たちがボランティアで参加。食堂の運営費の多くは寄付などで賄われている。

取材で訪れたときも、多くの人が参加して笑顔で和気あいあいと食事を楽しんでいる光景が印象的だった。

こども食堂以外でも、地域住民が参加できる活動として、有機農産物などを販売する「自然と暮らしの市場」や「太極拳の会」を行っている。こうした活動の様子はSNSで発信しており、これが活動の広がりにつながっている。

こども食堂への参加者にインタビューすると、市外からやってきたという人や、こども食堂への参加をきっかけに自ら「ママ友サークル」の立ち上げを計画している人もいた。

平田寺が人と人とのつながりの輪を拡大する場となり、参加者の行動にも影響を及ぼしていることが分かった。

一方、財政的な問題はある。こども食堂などの活動の多くが寄付や参加者の手弁当で運営され、収益を生み出しているわけではない。寺の活動は住民の交流の場として十分な成果を上げており、住職は「現在の活動を通じ、檀家が増えることで平田寺が維持できるようになればよい」と語った。

初瀬門前町

寺社に付随するまちが

取り組んでいる事例

奈良県桜井市にある長谷寺は、8世紀初頭に建立された真言宗豊山派の総本山で、ここを中心に初瀬門前町が形成されている。同門前町は伊勢神宮参詣の宿場町として栄え、昭和40年ごろまでは飲食店や旅館が軒を連ね、大いににぎわっていたという。

しかし、近年は観光の多様化などで観光客数がピーク時から半減。町内の人口減少や高齢化も著しく空き家が増加するなど、かつての町並み



こども食堂で食事作り



こども食堂の様子



「長者亭」外観。隣りは空き地に



「憩いの森くろもん」外観

が失われつつあった。

こうした状況を改善しようと、地域有志らが平成17年に「NPO法人泊瀬門前町再興フォーラム」（以下「フォーラム」）を立ち上げた。平成21年に奈良県・早稲田大学と連携して「門前町における景観まちづくりの推進」事業をスタート。平成24年に長谷寺、地元観光協会、自治会なども参加した「初瀬門前町景観まち

づくりの会」を設立し、翌年には町家などの資源を活かした景観の保存・再生を打ち出した「初瀬地区景観まちづくり提言書」を市に提出した。

この提言を受け、市も初瀬地区のまちづくりに動き始めた。平成26年12月に奈良県と、平成28年3月に早稲田大学とまちづくり包括協定を締結し、「訪れて楽しくなるまちなみ・

歩きたくなる参道づくり」をコンセプトに「長谷寺門前町周辺地区まちづくり基本構想」をまとめ、平成30年5月に「同基本計画」を策定した。

現在は、市がソフト・ハードの両面でまちづくりの中心的役割を担い、フォーラムをはじめとした地域住民と協働でまちづくり事業を進めている。特にハード面では、町家改修に対する助成のほか、「歩きたく

なる参道づくり」に向けて歩車分離の道路整備計画を推進するなど、より重要な役割を果たしている。

一方、この地域に食堂や商店が少ないという問題に対処するため、フォーラムは町家改修の助成を市から受け、食堂運営や地元産野菜などの販売を行うコミュニティ町家「泊瀬長者亭」を整備した。また、「憩いの森くろもん」の町家改修では、1階に観光案内所や公衆トイレを、2階には地区の会合ができるような広間を整備し、観光客と住民の両面を見据えた町全体の活性化を図っている。

初瀬門前町の取り組み

みは、地域への強い思いが人を集め、行政と協働した地域一体の体制が整えられた事例として大変興味深いものだった。

まとめ

「寺社の役割についての考察」

寺社は、祭りなどを通してその土地に住む人々が紡いできた歴史・文化そのものであり、人々の価値観やアイデンティティ、そして誇りを生み出してきた。平田寺のような「実際に人の集う場」として、また長谷寺のような「地域の心のよりどころ」として人と人をつなぐ機能を担っており、こうした機能を維持していくことは、人口減少や地域コミュニティの衰退が進む中で一層重要になってきている。

厳しい地方の寺社運営をすぐに好転させるものではないが、寺社だけでなく地域そのものが存続していくためには必要な機能でもある。寺社は、「むらの中心」として存在してきた歴史的背景からその役割を十分に果たすことができるはずである。

地域活性化センター

最上 辰徳

松永 伶朗

（熊本県上天草市から派遣）

柏木 俊哉

（長崎県から派遣）
（鹿児島県霧島市から派遣）

環境に配慮した持続可能なまちづくり

— 先進国スウェーデンの取り組み —

国連が掲げる持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向け、日本政府が策定した実施指針では「省・再生可能エネルギー、気候変動対策、循環型社会」を特に優先すべき課題としている。そこで、環境先進国のスウェーデンにおいて環境に配慮した持続可能なまちづくりに取り組んでいる事例を調査し、地方自治体が果たすべき役割について考察した。

ロイヤル・シーポート地区のまちづくり

スウェーデンの首都ストックホルム市の北東に位置し、バルト海に面する港湾エリアにあるロイヤル・シーポート地区では、2010年から2030年にかけて国内最大規模の都市開発が行われている。

同地区では、徒歩や自転車などエネルギー効率の良い移動・輸送手段が優先され、住宅から徒歩5分以内の場所に公共施設や日用品スーパーが設置されている。また、街中や住宅の共用部分にあるバキュームシステムに捨てられたごみは、地下に埋められた管で吸引されて運ばれるため、ごみ集積所をいくつも設置する必要がない。

各家庭の流し台には生ごみを粉碎して下水へ流す仕組みもあり、生ごみはバイオガスへとリサイクルされ、バスの燃料となる。市が運営する移動式中古品リユースセンターでは、ごみに近い中古品も無料で引き取り、修理後は市民に無償提供している。



バキュームシステム



ロイヤル・シーポート地区の街並み



中古品リユースセンター

地区内の住宅は太陽光エネルギーの利用が義務付けられるなど、エネルギー効率が大幅に高められている。このほか、緑化やデザインなどにも厳しい基準を設けることで、住宅会社は自社の技術を駆使して様々な工夫をするようになり、イノベーションにつながっている。また、市は住宅会社の社員を対象に研修を行い、まちづくりの目標を十分理解してもらうとともに、新しい技術を持つ会社同士の交流が新たなプロジェクトを生み出すことを狙う。

ウプサラ市の温暖化対策

スウェーデンで4番目に大きいウプサラ市では、行政が市内外の企業や大学、環境団体などと連携して3年周期で様々な温暖化対策プロジェクトを行っている。構成メンバーは回を重ねるごとに増え、調査時点では37に上る。目標達成には、プロジ

エクトを通じてメンバー間で目標を共有し、リーダーから実践担当者までが同じゴールを目指すことが重要であるという。

こうした取り組みが評価され、同市は世界自然保護基金（WWF）が開催する自治体の温暖化対策に関する国際コンテスト「ワンプラネット・シティチャレンジ」で2018年の世界最優秀自治体となった。

自治体の役割

以上の事例から、日本の自治体が環境に配慮した持続可能なまちづくりを実現するには、①高い目標を設定する②企業の参入を促す③住民の環境意識を向上させる④多様な主体を巻き込んだ組織づくりに取り組む— ことが必要になると考えられる。

前地域活性化センター副参事

● 関口 英樹

女性が活躍できる地域づくり — 世界を牽引するニュージーランド —

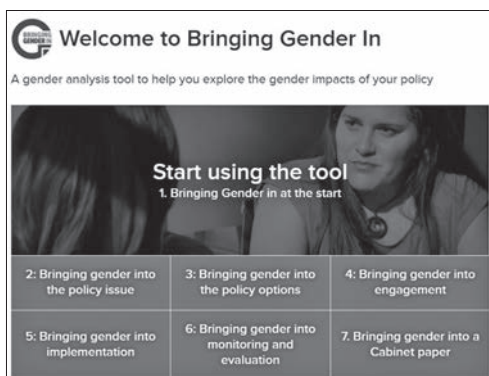
1893年に世界で初めて女性の参政権を認めたニュージーランドで、2017年10月にジャシンダ・アーダーン氏が37歳で世界最年少の女性首相に就任した。アーダーン氏は首相就任後に出産し、産前産後休暇を取得したことが世界中の話題になった。ニュージーランドは今もなお、女性が最も社会進出しやすい国の一つと見られている。そこで、男女共同参画の分野で世界を牽引してきたニュージーランドの現況を調査した。

女性省の役割

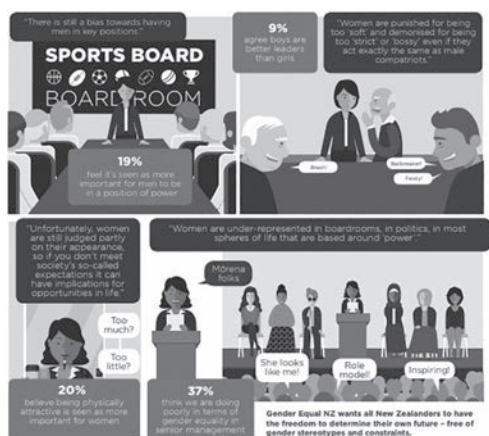
ニュージーランド女性省は、女性を取り巻く環境の向上に関する情報を各省庁に提供する機関だ。特定の法律を所管せず、各省庁の政策に対して女性の視点を加えることで付加価値をつける役割を担っている。

同省は、国が政策立案をする際に、その政策によりどのような人々が利益を享受するのか分析することが、ジェンダー平等の観点からとても重要だと考えている。そこで、女性やLGBT（性的少数者）を取り巻く社会環境を改善することを目的として、2019年7月に「Bringing Gender In」を導入した。

これは、各省庁が立案するあらゆる



「Bringing Gender In」のウェブページ



調査内容を漫画にして配布



取材時の写真（左から2人目がパニサ・ディル氏）

る政策に対して、ジェンダー差による影響の有無を調査するためのオンラインツールである。ジェンダー平等の思考を促す重要な質問が用意されており、併せて優れた実践例や有用なデータベース、関連資料へのリンクなどが提供される。

ジェンダー意識調査

1896年に市民団体の「ニュージーランド女性評議会」が設立され、女性省と定期的に意見交換を行っている。同評議会が2017年に18歳以上の男女約1300人を対象に実施した同国初のジェンダー意識調査によると、ジェンダー平等が基本的な権利であると認識しているのは国民の79%にとどまっている。この結果を受け、評議会代表のパニサ・ディル氏は「法律を変えることは簡単だが、人々の意識を変えることは

とても難しい」と語った。

評議会では、多くの国民にこの結果を認識してもらうとともに、それぞれが持つジェンダー意識を話し合う機会を創出するため、調査の内容を漫画にして学校や会社などに配布している。

女性が活躍できる地域づくり

法律を整備しても、人々の意識は一朝一夕に変えられるものではない。これを認識した上で、全ての女性が幸福になることを目指し、あらゆる政策においてジェンダー平等の意識を取り入れることが重要だ。

また、ジェンダー平等の意識を共有し、家庭や職場でジェンダーに基づく役割の固定観念を打破していくことも求められる。

前地域活性化センター副参事

● 遠山翔

皮より中身、皮むき冷凍ミカンで勝負！

—新商品開発の苦悩と転機—



渡江から一步を踏み出す会 会長

● 濱木 由規雄

渡江地区の現状

愛媛県西予市の渡江地区は、全国津々浦々で社会問題化している人口減少の波に乗り、「少子高齢化」「農業後継者」「耕作放棄地」「鳥獣被害」「空き家増加」「病院難民」など、ご多分に漏れずたくさん抱えています。

人口減少率はこの10年で33%減（平成22年248人→令和2年167人）となっており、限界集落を超えて集落消滅の危機すら見えています。

渡江地区には69世帯が住み、そのうちミカン農家（兼業含む）が23世帯と3割を占めています。年齢は最も若い人が44歳、最高齢者は80歳で、平均年齢は64歳。作業をするにも、足腰が悲鳴を上げているおじいちゃん、おばあちゃんがたくさんいます。

後継者と所得増が課題

このような現状を何とかしたいと、地区住民の皆さんが「渡江から一步を踏み出す会」を設立し、解決に向け取り組みすべき二つの目標を立てました。一つはミカン農家の後継者を育成すること、もう一つは農家の所得を上げることです。

このうち、後継者の育成はすぐに取り組むことが難しいため、行政と協力して地域おこし協力隊制度を活用するなど、今後じっくり取り組むこととしました。そこで、まずは農家所得の向上に重点を置いて事業を実践することにしました。

冷凍ミカン作り

「ミカンで地域を元気にしたい！」

との思いから、冷凍ミカンを作ることになりました。そこに至ったきっかけは、約8年前にさかのぼります。

会員の一人がネットショッピングをしているときに、冷凍ミカンが販売されているのを見つけました。そして、その価格に驚きました。通常、生果ミカンの値段は高くても1個100円です。ジュースなどの加工用になる見た目の悪いミカンだと、ほとんど1個2円や3円で売られています。それが、皮をむいて冷凍しただけのミカンが1個200円で販売されていました。これを見てすぐに地区の女性たちに声を掛け、ミカンの皮むきを始めました。

苦悩

作業を始めてまもなく、誤算があったことに気づきました。それは、

大量生産できないことです。メーカーが販売している冷凍ミカンは、安全な薬剤を使用して皮をむいています。これに対し、われわれは手作業です。そもそも生産量自体がメーカーとは大きく違いました。

冷凍ミカンを作り始めて、業者を対象にした商談会やフェアなどに参加したのですが、求められたのは「数量」「納期」「規格」の三つでした。味や品質には納得してもらったので、学校給食への提供を持ちかけたところ、膨大な数量と安定した納期、そして同一の規格を求められ、なかなかマッチングさせることができませんでした。

転機

そんな中、ある商談会で会場内を散策していたところ、冷凍イチゴを販売している人を見つけました。しかも価格はミカンの2倍。「いいなあ」と、そのときはうらやましく思いました。翌年の夏、ある会員が西予市内のブドウ農家に収穫のお手伝いをしに行き、売り物にならなかった大量のブドウをもらってきました。会員の家族だけでは食べ切れなかったため、「冷凍すれば長持ちさせることができる」と、会員みんなで冷凍ブドウを作ったところ、これ



西予市産のフルーツを冷凍して詰合せた新商品



ミカン農家にボランティアがやって来た



商談会で冷凍ミカン売り込み

当会には、急速冷凍することで細胞を壊さずにおいしさを維持できる特殊な冷凍機器がありました。それがよかったのです。「これは売れる」と考え、みんなで協議しました。そ

の中で、商談会で販売されていた冷凍イチゴにも思い至り、ミカン、ブドウ、イチゴをミックスさせた「アイスフルーツボックス」を考案することができました。

西予市のキャッチフレーズは「本州スッポリ西予」です。標高0^{メートル}から1400^{メートル}までの土地を有し、本州の気候が全て西予市で体験できるのです。ここでは多くの果物が栽培

されており、当然イチゴとブドウを栽培している農家

もあります。早速、交流のあるイチゴ農家とブドウ農家に連絡し、収穫時期に原材料を分けてもらう約束を取り付けました。

イチゴ、ブドウ、ミカンは収穫時期がそれぞれ違うので、冷凍作業の時期も異なります。

それらを夏前に袋に同封し、試作品が完成しました。冷凍ミカンはオレンジ一色の彩りでしたが、ミックスでは赤や緑、紫が入り見た目も良くなりました。何より高級感を出すことができました。

けても勝負できると感じました。今後は、ふるさと納税の返礼品として全国にも広めていきたいと模索しています。

展望

当会は、大きな目的として「10年後も渡江地区が存在すること」「地区住民がシビックプライドを取り戻すこと」の二つを掲げています。まずは、今住んでいる人が楽しく幸せに過ごせるような事業に取り組むことで、地域外から人を呼び込むことが可能と考えています。アイスフルーツボックスはその手段のひとつです。まずは、農家のやる気ややりがいをアップさせたいと思っています。

それと並行して、地域おこし協力隊の募集により農業後継者を育成し、都市と農村をつなぐ関係人口の構築や、高齢者を含む異世代間交流の場の創出、雇用の創出など、地区住民が生き生きと過ごせる場の提供にも取り組みたいと考えています。

※アイスフルーツボックスをご希望の方は次の連絡先まで。

「渡江から一歩を踏み出す会」

電話・090(1171)6273

メール: toIpokai@gmail.com
(担当・西村)

地域づくりの 現場から

全国協議会登録団体の紹介

認知症キャラバン・メイト 南勢地区連絡会 (三重県南勢地域)

団体プロフィール

設立＝平成29年5月15日
代表＝東村 篤
構成人員＝38人
(YYプロジェクト13人)

〈連絡先〉
三重県伊勢市船江3丁目17-19
日本モッキ (代表＝中山 拓)
TEL 0596-65-6039
Facebookページ検索参照

連絡会設立の経緯

厚生労働省の「認知症施策推進総合戦略」認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて、「(新オレンジプラン)」に基づき、三重県南勢地域に「認知症キャラバン・メイト南勢地区連絡会」が平成29年5月15日、関係市町や医療・介護施設、伊勢まごころ市民後見センターいせ、

木製パズルをツールに認知症対策

― 木材振興で循環型地域づくりにも貢献 ―

協栄学園、エーザイなどの賛同・協力を得て設立された。

連絡会の設立と同時に、循環型の地域社会構築を目的とした「YYプロジェクト」(イメージ図参照)もスタート。木製パズルをツールとした認知症対応活動として、認知症サポーター養成講座にとどまらず、「大人のバズる広場」シニアのための「脳トレ」を各地で展開している。

活動開始の契機は、平成24年に伊勢の夏の風物詩で、伝統ある高柳の夜店「四日市大学の日」に、同大の戦略経営ゼミが研究機構関孝和数学研究所の協力を得て「Yパズル」を出品したところ、これが人気を博し大盛況となったことだ。

以来、夜店での出品がパズルデザイナーでアソビディア代表の山田力志氏の目にとまるようになり、共同で活動することになった。そこに起業して間もない「日本モッキ」の中

山拓代表が加わり、YYプロジェクトが始動した。

本プロジェクトは、平成30年度伊勢市活性化活動事業補助金補助事業に採択され、今後の実践・検証を踏まえ、「伊勢モデル」として全国各地に広めることを目指している。

主な事業活動

YYプロジェクトでは、認知症の本人とその家族、医療・介護・福祉の専門職などへのヒアリングを基に、伊勢市産業支援センター、三重大学医学部、大阪商業大学アミューズメント産業研究所、四日市看護医療大学などから助言をいただきながら、認知症の予防や進行を遅らせることに役立つパズルなどの研究開発を行っている。

病院と介護施設を運営している医療法人や社会福祉法人などでのレクリエーションを通して、利用者・職



四日市大学研究機構
環境技術研究所 研究員

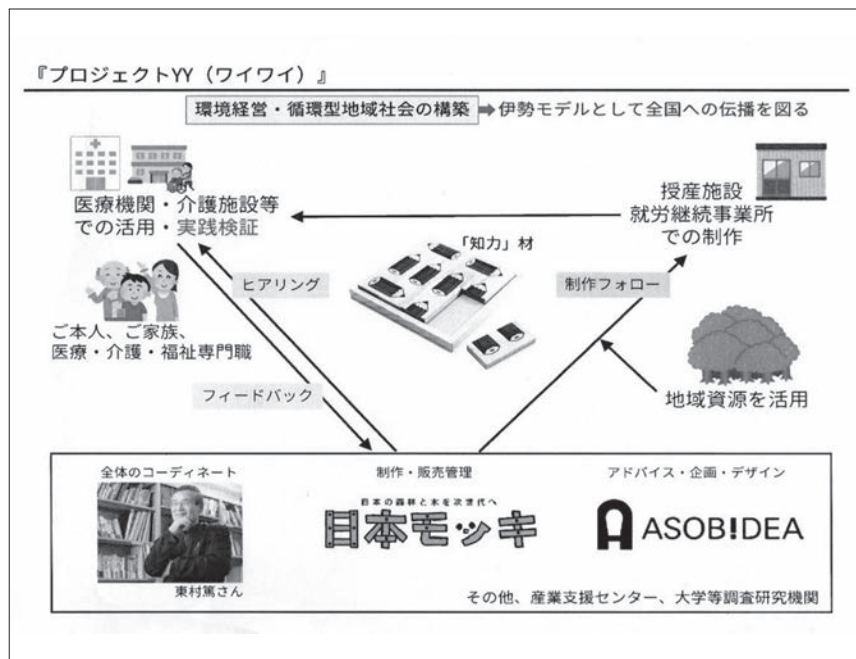
● 東村 篤

員向けの研修を実施するとともに、市民一人ひとりが認知症への理解を深め、自身または家族から認知症を遠ざける活動として、支え合いの「場」づくりに取り組み、ブックレットを配布して普及に努めるとともに、関係学会で認知症に対するパズルの有効性について発表してきた。

今後の課題

これまでの活動を通じ、幾つかのデイケア介護施設などで「パズる広場」を行ってきており、施設管理者側(介護職員や看護職員)と利用者側(高齢者)の双方から様々な意見をいただいている。これらをフィードバックして現場に合ったパズルを制作していくことがメンバー共通の課題だ。

その先には、「パズルが認知症に効く」ということを学術的に証明するという目標も据えておきたい。も



プロジェクトYY



脳トレする利用者とのレクチャー



大人のパズル広場チラシ

もちろん、データを継続的に取得するためには、現場スタッフや利用者はじめ多くの人たちの協力が必要と

なるが、本プロジェクトがその中核を担うことを期待している。

また、継続的・長期的にパズルを活用していく環境づくりが必要になるが、パズルの完成だけをモチベーションにすると、パズルの内容をいくら変えても利用者に飽きられてしまう可能性がある。そこで、パズルが五つ完成するたびにメダルがもらえたり、パズルの完成を「四国八十八カ所巡り」になぞらえたスタンプ

ラリーにしたりするなど、モチベーションをアップさせる仕組みづくりが課題になる。

特に認知症は、薬物療法で症状の進行を遅らせ、物忘れや判断力の低下を改善させる効果が期待できる。また、家族や友人・知人などとのコミュニケーションをはじめ、体や手足を動かしたり、パズル・クイズなどで脳に刺激を与えたりする生活習慣が症状の緩和に期待できるとさ

れ、こうした実践によるデータ蓄積がますます必要となる。

ただ、今回の新型コロナウイルス感染拡大阻止でイベントとしての「場」の提供は計画見直しを余儀なくされ、今後の対応も課題となる。

本プロジェクトは、手触りが良く温もり感のある木製のパズルを活用することで、地域の木材資源振興を図る循環型社会づくりも目的としている。人生100年時代にあつて、パズルが認知症予防や、その進行を遅らせる効果の選択肢の一つとして定着し、それが林業振興やモノづくりの伝承・継承につながるとともに、機能訓練や作業療法の一環として保険適用されることにも期待している。認知症と共に生きる地域包括ケアシステム構築のもとで、こうした支え合いづくりに微力ながら貢献していきたいと考えている。

詳細については、拙文「パズルをツールとした認知症対応プロジェクトへの期待」(四

日市大学論集 第31巻第2号 2019年3月掲載)をご参照ください。



いちごー会から始まる未来創生 ー女性の関係人口創出に向けてー

地域活性化センターでは、地域づくりに関心のある方々に地域活性化に資する事例や考え方を紹介し、今後の活動の参考にしようというため、開催地の現状に即したテーマで「地方創生フォーラム（地方版）」を開催している。今年度の第1回は5月29日（金）、「いちごー会から始まる栃木の未来創生ー女性の関係人口創出に向けてー」をテーマに栃木県と同センターが共同で開催した。

栃木県は、まち・ひと・しごと創生総合戦略の県版「とちぎ創生15戦略（第2期）」において「関係人口」の創出拡大を掲げている。フォーラムでは、月刊「ソトコト」編集長で関係人口の提唱者でもある指出一正氏が「関係人口のつくり方」と題して基調講演し、その後、白鷗大学教授の児玉博昭氏らをコーディネーターにパネルディスカッションを行った。今回は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から初めてオンライン開催し、7月3日に動画で配信した。

基調講演

指出氏は、まず関係人口を創出するための様々な事例を取り上げ、関係人口が生まれるきっかけについて話した。指出氏は、面白いことが始まった場所・空間・コミュニティには自分が関わることでできる「関わりしろ」（余白）が生まれ、そこに何かやりたいと思う人が集まって来ると指摘。新しいことが始まりそう

な場所をつくり、新しい人を受け入れる機能をつくるのが大切だと強調した。

最後に、関係人口を理解するための三つの視点について解説。1点目は、多様な要素を持ちながら人が滞留する施設「関係案内所」を作ることで、「観光以上移住未満」の関係人口が現れやすくなるような仕組みをつくっておくことが重要だと述べた。2点目としてその場所に参加し

た人が3カ月後や1年後の未来を自分がつくっていること、3点目には自分がそこにいることで「自分ごと」として楽しさを感じられるような環境であることを挙げ、「代わりはいない。自分でなければいけない」と感じられる環境をつくる必要性を指摘した。

指出氏は、関係人口を創出する立場でも、関係人口として訪れる立場でもこの三つの視点は外せないと言った。

パネルディスカッション

児玉氏のほか栃木県にゆかりのある3人の女性をパネリストとして迎えた。最初に栃木県地域振興課長から県の現状について説明があり、女性3人が自身の経験をもとに各テーマについて話した。

ゲストハウス「街音ECHO」オーナーの豊田彩乃氏は、大学卒業前に那須塩原市地域おこし協力隊として移住し、任期満了後は移住定住コーディネーターとして従事した。現在はゲストハウスのオーナーとして



基調講演した指出一正氏

活動している。その経験をもとに、子育て環境を考える世代には栃木の

魅力が届いているが20代前半の世代には魅力が届けられていないと語った。やりたいことが

できる場所というのを伝えると、自然と人は来てくれると話す豊田氏は、日々新たな企画に挑戦しているという。

栃木県を拠点に活躍するフリーランス司会者の山口あや氏は宇都宮市出身。地元で歯科衛生士を続けながら、司会やラジオのパーソナリティ、イベント・スポーツ大会のMC、温泉PR大使など幅広く活動している。栃木で活動してきた経験を踏まえ、若い女性には栃木にいても東京の仕事ができることを伝え、背中を押してあげる存在になりたいと語った。

「YUM innova 合同会社」のCEOで「とちぎ

未来大使」も務める義達祐未氏は、高校卒業後に上京し、芸能活動を開始。2017年には都内に会社を設立し、ジャンルの違う様々な仕事を同時進行しながら、栃木の地域振興に取り組んでいる。「東京で得た経験を生かして栃木の関係人口のモデルになり、栃木の魅力を伝えたい。それが関係人口を増やす機会になれば」と話した。

続くパネルディスカッションは、「なぜ栃木県から女性が転出してしまうのか、どうすれば戻ってきてもらえるのか」をテーマに始まった。

栃木県では20〜24歳の女性の多くが東京圏に転出しており、転出者全体の約4割を占める。転出のタイミングは就職や進学で、東京圏には選択肢が多いことがその理由と推測される。一方で30歳前後の子育て世代では、子育て環境の改善を図るため東京圏からの移住を考える人も多い。若い人に戻ってきてもらうためには、栃木で暮らす素敵な未来を描く女性像を東京圏と県内の若者らに伝えることが大切との意見が出された。

次に「女性に栃木県の関係人口になってもらうにはどうすればいいのか」が議題となった。栃木県は、関係人口創出・拡大に向け、市町や企業・団体と連携した関連情報の一覧化やウェブサイトの拡充、県出身の若者に向けたLINEによる情報発

信などに取り組んでいる。討論では、これらの施策を後押しして、関係人口のさらなる創出を目指すための意見が相次いだ。

アドバイザーを務めた指出氏は、関係人口のターゲットとされている人々に栃木県と関わることでどんな幸せが与えられるかを考えることが大切で、人と人の出会いを意識的に創出していく必要があると述べた。

最後に、パネルディスカッションの総評として児玉氏が、東京圏からの往来のしやすさを栃木県の強みに変え、「流動」を生み出すことが女性の転出抑制や関係人口の創出につながるかと締めくくった。

基調講演とパネルディスカッションを通して、関係人口のターゲットである女性や若い世代に地域の魅力を伝えていくことの大切さを知る機会となった。

地域活性化センター
情報・広報グループ

●吉岡実紀（松江市より派遣）



『地方創生フォーラム in 栃木』の様子はこちらからご覧いただけます！

ただいまから「地方創生フォーラムin栃木〜いちご一会から始まる栃木の未来創生」と題しまして、パネルディスカッションを始めたいと思います。

パネルディスカッションのパネラー。上段左から指出一正氏、義達祐未氏、豊田彩乃氏、下段左から山口あや氏、児玉博昭氏、菅保宗良氏



養成塾のつながり活かした 公民連携

～それぞれの視線から手法を学び合う～

NPO法人頴娃おこそ会 副理事長 ● 加藤 潤

鹿児島県南九州市頴娃町^{えい}。私たちのNPOが活動拠点を置くのは、薩摩半島南端にある、ほとんど読める人がいないであろう小さなまちです。このNPOのメンバーで一民間人である私が、地域活性化センターの「全国地域リーダー養成塾」に参加する機会を得たのは、2015年のことでした。NPOを通じ行政との関わりが多かったとは言え、民間からの参加は当時全体の1割ほどにすぎず、行政職員の皆さんと一体となった研修機会はとても貴重なものでした。

「全国から参加した受講生と同じ釜の飯を食う関係を築くことで、メールや電話一本で頼みごとができる仲間を全国に持てるのが、この研修の意義」。養成塾のある講師の言葉です。当時、空き家再生に着手するも苦戦していた私たちは、これを具現化するかのように、養成塾同期生の安富圭司さんにアドバイスを求めました。徳島県神山町で開かれた同センター主催の研修に参加したその足で、同町に隣接し、空き家再生で先行していた佐那河内村の安富さんを訪ねたのです。

不動産業が機能していなかった私たちのまちで取り組んだのは、空き家をNPOが借り受けて改修を施し、問い合わせのあった移住希望者に貸し出すことです。いわば、NPOがワンストップ窓口を担うサブリース的なスタイルで、佐那河内村が手掛けていた手法を応用したものでした。

空き家再生を手掛けた当初の私たちは、まだ資金力もノウハウも乏しく、国の地方創生事業や、集落支援ネットワーク圏形成事業などを活用することで、実践を積んでいきました。国の事業を活用していく上で、養成塾の同期生との交流から行政感覚を培ったことが役に立ちました。数年後、これらの事業が会計検査の対象となりましたが、同期生からの学びに助けられ、無事クリアできました。

受講翌年の2016年からは南九州市と連携し、NP

Oが地域おこし協力隊員の受け入れ母体となりました。隊員らの住居確保に空き家を活用したほか、彼らのオフィスや交流拠点、2軒の宿など、現在までに計9軒の空き家再生が実現するに至りました。

当初の再生費用はほぼ行政助成金頼みでしたが、ノウハウ蓄積を通じ100万円以下で改修を実施するなど徐々にコストダウンを図り、2019年に手掛けた2軒は、移住者から受け取る家賃収入で改修費を賄うことができました。助成金に頼らない採算化に向けた歩みが始まっています。安富さんとは、その後も互いに行き来し、行政と民間団体のそれぞれの目線から地域活動の手法を互いに学び合う関係にあります。

このほかにも、養成塾への参加で得たものは多々あります。

修了レポートでテーマとして取り上げた頴娃町番所鼻公園内の廃墟問題については、レポートをきっかけに市と地域メンバーの間で公民連携型の「パークマネジメント協議会」が立ち上がり、ここでの議論積み上げを経て、2019年には市が公費による施設解体を決断、実現するに至りました。

NPOの年間予算は、行政連携事業が増加した2016・17年度は2000万円程度に膨らみましたが、2018年に助成金依存からの方針転換を図ることで半額以下に圧縮し、NPOの子会社として立ち上げた株式会社オコソコに、宿運営収入などの地域事業を移管することとしました。地域おこし協力隊OBが代表に就任し、年間1000万円ほどの売り上げとなった同社と合算すると、結果的に予算規模はさほど変わらず、筋肉質になったとも言えます。

2017年には総務省ふるさとづくり大賞で総務大臣賞を受賞したほか、最近では他地域での空き家再生や協力隊運営、地域団体設立のサポートを行うまでになり、受講後の展開の広がりには改めて感謝の想いです。



山形県新庄市長

山尾 順紀

「まちづくりは人づくり」

新庄市は、山形県北東部に位置し、夏は暑く冬は降雪量が多い日本海側特有の豪雪地帯です。山々や河川等の豊かな自然環境を有し、寒暖差がもたらす食の宝庫であるとともに、四季折々のイベントが開催されています。また、最上圏域（1市4町3村）の中心都市としての機能を有し、鉄道・道路ともに東西南北の結節点に位置している交通の要衝で、山形新幹線の発着駅ともなっています。

東北の夏祭りを締めくくる伝統の祭りとして脚光を浴びている「新庄まつりの山車行事」（8月24・26日）は、平成28年に「山・鉾・屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に登録され、県内外から3日間で50万人を超える多くの方が訪れるなど、市民にとってはなくてはならない故郷の祭りです。

新庄まつりは、無病息災や五穀豊穡を祈願し、神輿（みこし）御行列や歌舞伎・歴史物語を題材にした絢爛豪華な20台の山車が囃子（はやし）とともに市内を練り歩きます。山車は、若連と呼ばれる市内中心部にある各町内の若者たちが制作期間3カ月をかけて手作りで完成させます。また、囃子は郊外にある農村部の子どもから大人まで幅広い世代が集まって練習を重ね、祭り本番では囃子の音色で山車を盛り上げます。そして、山車の先頭を各町内の小若と呼ばれる子どもたちが曳き手となって市内を練り歩くなどまさに市民が一体となった祭りです。

祭りは、文化・伝統の継承という側面と地域間・多世代間の交流の場、まちづくり・コミュニティづくりという側面も持ちあわせています。祭りが260年以上にわたり継承されてきたのは、まさに地域力の高さであり、これからも「地域づくり」の基盤として受け継がれていくものと実感しております。

地域づくりで大切なことは、多くの市民が地域に関心を持ち、地域の課題を共有し、協力して課題解決に取り組むことです。本市では、今後とも地域コミュニティの

活性化を図るため、地域活動に対する支援体制をさらに強化し、市民とともに地域づくりを進めてまいります。そのひとつとして、中学校区を単位に、地域の暮らしを地域で支える組織「地域づくり協議会」の設立を予定しています。協議会は地域住民と行政とが協働して、高齢者の通院・買い物、雪処理、災害時の避難、地域の担い手育成など、地域生活に密着した課題を解決していく仕組みとして機能することを目的としています。高齢者の通院・買い物、雪処理、災害時の避難、地域の担い手育成など、地域生活に密着した課題を解決していく仕組みとして機能することを目的としています。高齢者の通院・買い物、雪処理、災害時の避難、地域の担い手育成など、地域生活に密着した課題を解決していく仕組みとして機能することを目的としています。

また、災害時の避難については、地域における防災力の強化が重要です。自分の住んでいるまちは自分たちで守るという意識を高めるためにも、全町内に自主防災組織の立ち上げを進めています。「自助」「共助」「公助」の中で、公助は被害規模が大きな箇所への対応が主となるため、自助を基本としながらも共助が緊急時の対応には最も有効に機能します。そのため、共助の担い手となる自主防災組織の活性化を図りつつ、地域の避難所毎に学校区を単位とした地域的にまとまりのある防災組織の立ち上げも不可欠です。避難所開設時には、この組織が主体となって避難所運営にあたるなど、地域としての防災力を高めていくことが、地域力の向上にもつながっていくものと考えています。

いずれにしても、これらの取り組みを進めていくためには、地域の担い手の育成が必要です。地縁的なつながりのある町内会同士のコミュニティの活性化を図りながら担い手を育成し、今後とも「まちづくりは人づくり」を理念に、誰もが安心して暮らせる住みよいまちづくりに取り組んでまいります。

その湖に、響きつづける歌がある。
ウポポイ



2020.7.12 OPEN

アイヌの世界と出会う場所。[北海道・白老町]

Hokkaido-Shiraoi



ウポポイ

NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間

嬉野市は、佐賀県の南西部に位置し、長崎県との県境に接する緑に囲まれた山間のまちです。北部九州有数の温泉地を擁するとともに、「うれしの茶」や肥前吉田焼、長崎街道の面影を残す歴史的な町並みなど、観光資源に恵まれた地域です。

嬉野温泉は、古くから湯治場として知られ、現在では肌にやさしい泉質により「美肌の湯」として若い女性の方々に高い評価を得ています。風呂上がりのお肌のすべすべ感は日本一の泉質と自負しています。

また、温泉を使った「嬉野温泉湯豆腐」も有名で、温泉の成分でトロトロになった湯豆腐をぜひご賞味ください。

2022年には新幹線の嬉野温泉駅（仮称）が開業する予定となっています。これまで鉄路がなかった嬉野市に念願の新駅ができ、アクセスも容易になります。

ぜひとも嬉野市へお越しいただき、温泉でくつろぎお風呂上りにうれしの茶でゆったりと「うれしいひととき」を過ごしてみたいはいかがでしょうか。



嬉野温泉湯豆腐は、温泉成分で溶けてトロトロに。他では食べられないグルメです。



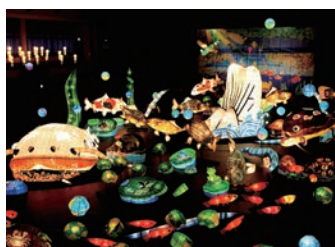
轟の滝公園
数百万年前の火山活動で出来たといわれる落差11m、滝つぼの面積約2500平方mの滝。平坦地にある滝としては珍しい大きさです。肥前風土記（8世紀）に記述があり、昔から知られています。



ティー・ツリー・リズム。一杯のお茶を求めて。茶師と共に。いつもと違う場所で味わう一杯が旅の目的。新しい切り口でお茶を提供しています。



嬉野茶畑
400年の歴史を持つ嬉野茶。栽培に合った良質な土壌、盆地の地形による寒暖差の大きさ、生葉に適切な水分を与える朝霧といったおいしいお茶が育つ条件を備えています。



あったかまつり（なまずの寝床）
毎年1月下旬から2月上旬に開催されています。昨年は「宵の美術館」として432体のランタンを展示し、幻想的な雰囲気を出しました。



スイーツ
長崎街道は、江戸時代に唯一の開港地だった長崎・出島と小倉を結び、当時は貴重だった砂糖を使った菓子屋や飴屋が並び、「シュガーロード」と呼ばれました。中でも、砂糖を煮溶かして鯛などの型に流し込んで固め、表面を彩った「金花糖」は、菓子職人の手によって受け継がれている貴重なものです。シュガーロードは令和2年6月19日に日本遺産に登録されました。



嬉野温泉
炭酸水素塩泉・塩化物泉の弱アルカリ性の泉質で、皮膚の角質層を溶かしてお肌はすべすべしっとりとし、湯上りはさっぱり。心なみ、体を癒やします。



百年桜
肥前吉田焼で知られる吉田地区の茶畑の丘に、凛と立つ1本の桜。樹齢100年を超え、高さ13m、枝張り20mのスケールを誇る八重のヤマザクラです。



肥前吉田焼
400年前から続く伝統産業です。丈夫で使い勝手がよい茶わんや湯のみ、急須など、人の生活に即した普段使いの食器を作ってきました。旅の思い出に一ついかがでしょうか。



宝くじは、 みなさまの豊かな暮らしに 役立っています。



宝くじは、図書館や動物園、学校や公園の整備をはじめ、
少子高齢化対策や災害に強い街づくりまで、さまざまなかたちで、
みなさまの豊かな暮らしに役立っています。

一般財団法人 日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や
公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。



キラリと光る わがまち自慢の全国大会

地域づくり 特集編

目次

表2 グラビア

- | | |
|---|---|
| <p>2~5 基調論文／大谷尚之
イベントを通じた地域資源の創造と経営資源の調達</p> <p>6~7 北海道芽室町／田川唯史
「おもてなし」の心で全国大会</p> <p>8~9 青森県弘前市／吉澤佳苗
ファッション学ぶ高校生の「甲子園」</p> <p>10~11 秋田県大仙市／伊藤優俊
野球に燃える親父たちの「甲子園」</p> <p>12~13 山形県天童市／山口 幸
老若男女が競う「くちびる美人」</p> <p>14~15 茨城県龍ケ崎市／大竹 昇
コロッケによるまちおこし</p> <p>16~17 長野県大町市／西條哲也
北アルプス山麓で全国初の囲碁村づくり</p> | <p>18~19 奈良県大和郡山市／植田早祐美
スポーツになった金魚すくい</p> <p>20~21 広島県安芸高田市／松田祐生
高校生が熱く舞う「神楽甲子園」</p> <p>22~23 鳥取県／米澤 章
「手話の聖地」ではじける熱い想い</p> <p>24~25 山口県山口市／椎木耕司
餅は買うものにあらず！</p> <p>26~27 愛媛県東温市／田井秀一
舞台芸術で豊かな未来を創造</p> <p>28~29 鹿児島県天城町／鹿児島県天城町商工水産観光課
闘牛文化の継承・発展へ全国サミット</p> <p>30~33 副基調論文／北川フラム
人間活動の原点ゆらす体験を意味あるものに</p> |
|---|---|

2020年8月1日発行 編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター ©2019 jcrd.jp

東京都中央区日本橋 2-3-4 日本橋プラザビル 13 階 電話 03-5202-6131 (代) <https://www.jcrd.jp/> 印刷・製本／株式会社太平印刷社

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



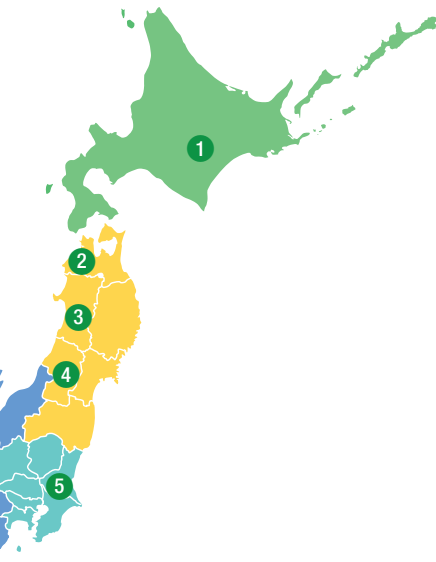
キラリと光るわがまち自慢の全国大会



② 青森県弘前市 (p8-9)
ファッション甲子園2019表彰式の様子



① 北海道芽室町 (p6-7)
ゲートボールは北海道芽室町が発祥の地。1987年から全国大会の「発祥の地杯」を開催



④ 山形県天童市 (p12-13)
「第31回全国くちびる美人コンテスト」で最高賞の「ベストリップ賞」に選ばれたくちびる。賞金は10万円



③ 秋田県大仙市 (p10-11)
第3回全国500歳野球大会で優勝した瞬間。親父たちの胴上げ



⑥ 長野県大町市 (p16-17)
「第19回アルプス囲碁まつり 長野県知事杯・市長杯争奪囲碁大会」の様子



⑤ 茨城県龍ケ崎市 (p14-15)
第7回全国コロッケフェスティバルin龍ヶ崎。女性によるコロッケ早食い選手権



⑧ 広島県安芸高田市 (p20-21)

桑田天使神楽団による上演。東京公演をはじめ各地で神楽を舞い、地域の素晴らしさを伝える



⑦ 奈良県大和郡山市 (p18-19)

『全国金魚すくい選手権大会』。第25回大会までの最高匹数は個人戦87匹、団体戦173匹



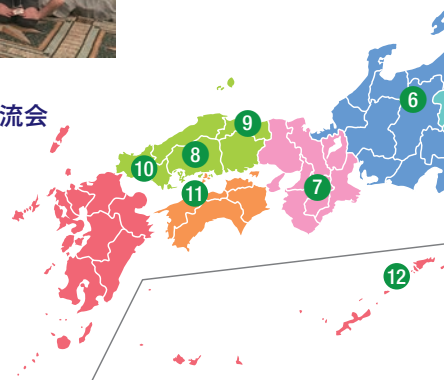
⑩ 山口県山口市 (p24-25)

『餅ひろい世界選手権』ピストルの音で試合開始



⑨ 鳥取県 (p22-23)

第6回全国高校生手話パフォーマンス甲子園の交流会



⑫ 鹿児島県天城町 (p28-29)

沖縄チャンピオン（有心邁進龍）を追いつける徳之島チャンピオン（力道山）



⑪ 愛媛県東温市 (p26-27)

「城ノブ」～愛媛のマザー・テレサ～

イベントを通じた

地域資源の創造と経営資源の調達

—仲間を集める新たな活性化モデルへの期待—

はじめに

「日本唯一」と「日本一」は似ているようで、少し異なるニュアンスを持っています。「日本唯一」が孤高の存在であるのに対し、「日本一」の後ろには同志や仲間が控えています。競い合うからこそ一番もいれば、ビリもいるわけです。「日本唯一」は絶対的な差別化で、「日本一」は相対的な差別化という言い方もできるかもしれませんが。

ランキング形式のイベントはときに多くの人を集めます。ご当地グルメによる地域おこしの祭典である「B-1グランプリ」やアイドルグループの総選挙などがその代表例です。それに対して、本号で紹介されている事例は、決してメジャーではないけれども、知恵を絞って地域自慢のために立ち上げられたイベントです。こなれない呼び名

で恐縮ですが、とりあえずは「地域資源訴求型ランキング・イベント」と名付けてみます。「地域資源訴求型ランキング・イベント」に求められる要素は、地域資源のアピールの場であること、順位付けすること、定期的なイベントとして開催されることの三つです。

政治学を専門とする上田道明氏（佛教大学）は論文の中で、地域資源の活用を巡っては、「売り出すべき資源がない」と「売り出すための元手（資金）やスキルがない」という「2つの『ない』」が阻害要因となることが多いと指摘しています（上田道明「『食のまちおこし』が示唆する地域活性化のヒント」『佛教大学社会学部論集』56号、2003年、79頁）。前者は地域資源の有無の問題であり、後者は経営資源（ヒト、モノ、カネ、情報）の多寡の問題です。内発的に地域活性化を図るためには、地域資源を発見（創造）し、その



宮城学院女子大学教授

● 大谷 尚之

筆者プロフィール

大谷 尚之氏

（おおたに・なおゆき）

宮城学院女子大学現代ビジネス学部教授

1973年宮城県生まれ。慶應義塾大学環境情報学部卒業、東北大学大学院農学研究科博士前期課程修了。博士（経営学）。宇都宮大学、愛媛大学の教員を経て現職。専門は地域マーケティング論。主な著書として、「産地組織のマネジメント—『コミュニティ』と『リーダー』が創り出す新たな地域農業—」（東北大学出版会、2009年、単著）、「コンテンツが拓く地域の可能性—コンテンツ製作者・地域社会・ファンの三方良しをかなえるアニメ聖地巡礼—」（同文館出版、2018年、共著）などがある。

地域資源を核として各種の経営資源を組み合わせ、持続的に活動を展開する必要があるのです。

地域資源と経営資源の二つの側面から、「地域資源訴求型ランキング・イベント」の特徴について考えてみましょう。イベントを企画する時点で、売り出したい地域資源は既に見つかっています。そして、イベントを開催する時点で、最低限の経営資源はそろっています。そうすると、イベント開催の効果と持続性が次の問題になるのだろうと思います。そこで本稿では、二つの事例を手がかりとしてこの問題を考えてみたいと思います。

ダルメイン世界マーマレード アワード&フェスティバル日本大会

松山市から南西に約50^{キロ}、九州に向かって突き出た佐田岬半島の付け根に位置する愛媛県八幡浜市は、日本有数のみかんの産地です。温州みかんの生産量は県全体の約4割を占め、市内の「真穴」「川上」「日の丸」といった産地ブランド（共選組織）は全国最高レベルの評価を受けています。

2019年5月、八幡浜市においてマーマレードの大規模な品評会が開催されました。「ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会」（以下「マーマレードアワード日本大会」と表記）です。「ダルメイン（Dalemain）」とは、英国湖水地方のペンリス市にある邸宅です。ダルメインの当主夫人であるジェーン・ヘーゼル・マコッシュ氏が、屋敷に古くから伝わるマーマレードのレシピを発見したことがきっかけとなり、2006年、「Dalemain Marmalade Award」（以下「英国マーマレードアワード」と表記）という

マーマレードの品評会がスタートしました。現在では、世界約40カ国から3000点以上のマーマレードが出品されるそうです。また、品評会に合わせて、まちをあげてのフェスティバルが開催されます。

英国マーマレードアワード（職人の部）において、八幡浜市在住の國分美由紀氏が出品したマーマレードが2017・2019年に3年連続で金賞を受賞しました（写真1）。主催者であるジェーン・ヘーゼル・マコッシュ氏は、國分氏をはじめとする日本人の出品作の質の高さや、原料として使用されている柑橘^{かんきつ}の種類の豊富さに感心し、日本大会の開催を検討します。その意向を國分氏から聞いた八幡浜市は大会の誘致に動きまゝす。そして、在英日本大使館の協力や市長・市職員の努力により2019・2021年の3回にわたるマーマレードアワード日本大会の誘致に成功しました。

2019年の大会は、5月12・19日に八幡浜市内の会場で各種のイベントと併せて開催され、2万人以上の来場者を集めました。品評会には、海外と42都道府県の712人から1614の出品があり、プロの部とアマチュアの部に分けて審査が行われました（図表1、写真2）。審査を担当したのは、英国大会の審査員2人と、落合務氏や陳建一氏、鎧塚俊彦氏などの有名料理人・有名パティシエを含む全10人です。

大会の誘致を契機として、八幡浜市は「マーマレードのまち」に向けて動きだしました。昨年は、大会の主催者や審査員を地域ぐるみで迎え、マーマレード教室やトークショーなどを通じて交流を

図表1 ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会（2019年）の出品状況

プロの部（応募者数148名）		アマチュアの部（応募者数564名）	
カテゴリー	出品数	カテゴリー	出品数
かんきつ1種マーマレード	205	かんきつ1種マーマレード	300
複数かんきつのマーマレード	37	複数かんきつのマーマレード	122
ミックス・マーマレード	99	ミックス・マーマレード	181
合計	341	子供のマーマレード	16
		高校生のマーマレード	27
		シニアのマーマレード	69
		男性のマーマレード	67
		ファミリーのマーマレード	24
		自家製のマーマレード	177
		愛媛産のマーマレード	139
		黒いマーマレード	97
		料理に合うマーマレード	54
		合計	1,273

資料：八幡浜市産業建設部農林課 世界マーマレード大会推進室



写真2 出品作が並ぶ様子
画像提供：八幡浜市産業建設部農林課 世界マーマレード大会推進室



写真1 英国マーマレードアワードで金賞を獲得した國分氏のマーマレード（瓶の中に見えるハートはライムの皮）
画像提供：國分美由紀氏

深めました。八幡浜市在住者の出品数は253品（全体の約16%）に上りました。また、大会のきっかけを作った國分美由紀氏は2019年12月に

一般社団法人JAPANマーメイド協会を設立し、マーメイドの普及拡大に取り組んでいます。

この事例のポイントは、大会をきっかけとして地域全体がマーメイドに関心を向けるようになった点です。マーメイドアワード日本大会は、専門家とのネットワークづくり、イベント開催やマーメイド製造に関するノウハウの獲得といった点で大きな役割を果たしました。

残念なことに、2020年5月に開催予定だった2回目のマーメイドアワード日本大会は新型コロナウイルス感染症の影響により中止となりました。しかし、2021年大会に続き、2022年大会も八幡浜市で開催することが決定しています。八幡浜市は農林課に世界マーメイド大会推進室を設置して事務局機能を整えており、今後の継続的なイベント開催が期待されます。

らき☆すた神輿

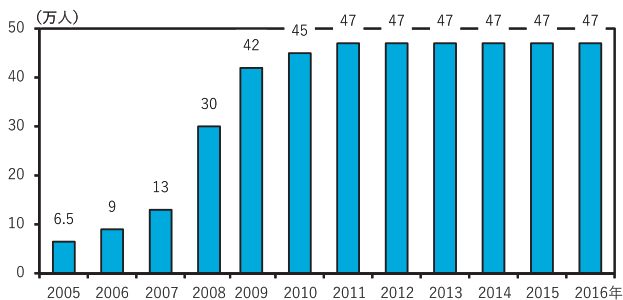
ランキングの要素はないのですが、地域イベントの興味深い事例として埼玉県久喜市鷺宮（旧鷺宮町）の土師祭（はじさい）を紹介します。埼玉県の北東部に位置する鷺宮は、アニメ「らき☆すた」の舞台のモデルの一つであり、「アニメ聖地」の先駆けとして知られています。「らき☆すた」は、女子高生4人のありふれた日常生活を描いた作品です。アニメ版では、主要キャラクターの双子の姉妹は、鷺宮神社をモデルとする「鷹宮神社」の神主の娘で、神社境内で暮らしているという設定がなされています。鷺宮神社は一説には関東最古ともいわれる由緒ある神社です。

2007年4～9月にアニメ「らき☆すた」が放送されると、ロケ地を知った多くのファンが鷺宮神社を訪れるようになりました。その後の詳細については省略しますが、地元商工会が「らき☆すた」の版權元である角川書店とコンタクトをとり、イベントの開催やオリジナルグッズの開発に積極的に取り組みました（詳しくは、大谷ほか「コンテンツが拓く地域の可能性」同文館出版、第4章などをご参照ください）。それにより、地元住民と「らき☆すた」ファンの交流が進みました。鷺宮神社の初詣客は、「らき☆すた」放送前の13万人から放送翌年には30万人へと急増し、その後も47万人まで増加しています（図表2）。

本号のテーマに関連して興味深いのが「らき☆すた神輿」です。鷺宮神社境内に収蔵されている「千貫神輿」の渡御行事である土師祭が毎年9月に開催されます（2018年以降は事情により開催されていません）。2008年夏、祭りの主催者からの働きかけにより、地元住民と「らき☆すた」ファンが協力して「らき☆すた神輿」を製作しました。「らき☆すた」のキャラクターが描かれた布で櫓（やぐら）を覆い、内側から照明で照らす形式の神輿です（写真3）。

「らき☆すた神輿」は、全国各地から集まった100人以上の「らき☆すた」ファンによって担がれ、祭りを大いに盛り上げました。「らき☆すた神輿」をきっかけとして、町内における「らき☆すた」ファンに対する評価が高まったといわれています。その後、2017年まで毎年「らき☆すた神輿」の渡御が行われ、2018年からは地域内の別の祭典で担がれるようになりました。2

図表2 鷺宮神社の初詣客数



資料：関係者への聞き取り調査により作成

注：初詣客数は関係者による概算。2007年の客数を9万人とする資料もある



写真3 らき☆すた神輿
画像提供：久喜市商工会鷺宮支所

014年6月には、「らき☆すた神輿準備会」が発足し、ファンが主体となって神輿の運営を担う体制となっています。

この事例のポイントは、住民の配慮によって、地域外のアニメファンが祭典に参加する機会を得、それにより地域に新たな文化資源が生まれた点です。近年は、千貫神輿と「らき☆すた神輿」



写真4 土師祭での「らき☆すた神輿」と千貫神輿の共演（奥が「らき☆すた神輿」）
画像提供：久喜市商工会鷺宮支所

の共演が土師祭のクライマックスとなっていました（写真4）。住民のほとんどは別に「らき☆すた」が好きだったわけではありせん。しかし、偏見を持たずに「らき☆す

た」ファンを受け入れ、交流を深めました。その最大の象徴が、「らき☆すた神輿」です。テレビアニメ放送から10年以上が経過した現在でも、ファンと地域住民との関係は続いています。

地域イベントを通じた経営資源の調達

身も蓋もない言い方ですが、経営資源の代表的要素は、「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」だとされます。一般に、これらの資源は大企業や都会に集まっています。しかし、乏しいからといって何もしないわけにはいきません。本稿で紹介した二つの事例からもわかるように、知恵を絞ったイベントは地域外から経営資源を調達する手段になりえます。

鷺宮では、「らき☆すた」の舞台のモデルになったことをきっかけに、地域住民と「らき☆すた」

ファンが交流を深め、「らき☆すた神輿」の製作と祭典への参加を実現しました。神社や神輿という既存の地域資源（モノ）を核に、「らき☆すた」ファンのマンパワー（ヒト）と彼らのノウハウを活用し、継続的にイベントを盛り上げることに成功しました。

八幡浜市のマーマレードアワード日本大会は、ランキング・イベントの特徴を明確に表しています。品評会形式のイベントを開催したことにより、国内外の著名な審査員と、全国各地から700人以上の出品者を集めることに成功しました。審査があるからこそ、入賞を目指して真剣に応募するわけです。八幡浜市は、マーマレードアワード日本大会の開催を通して、柑橘類という全国屈指の地域資源（モノ）を核に、地域内外の専門家や料理愛好家（ヒト）と彼・彼女らのノウハウ（情報）を集めたといえます。イベント開催は、地域住民のマーマレードに対する関心も高めつつあり、将来的には地域資源としてのヒトやノウハウの蓄積を期待することができそうです。そのためにもイベントの継続開催を目指してほしいものです。

二つの事例を踏まえて、「地域資源訴求型ランキング・イベント」を地域活性化につなげるための筋道を仮説的に示してみます。（地域資源の発見・創造→イベント化→経営資源（ヒト、モノ、カネ、情報）の調達・活用→地域文化の創造）という流れです。

地域資源にちなんだイベントの開催を通じて、既存の地域資源と地域内外の経営資源を組み合わせるができます。継続的なイベント開催により、地域資源のアピールと経営資源の蓄積を期待

することができます。そして、住民の理解が深まり、地域の生活文化として定着させることができます。地域ブランド力の向上が視野に入ってくるものと思います。「地域資源訴求型ランキング・イベント」は短期的な経済効果の追求よりも、中長期的な経営資源の蓄積と地域文化の醸成を目標とした方がその力を発揮するのではないかと考えています。

おわりに

繰り返になりますが、本号が取り上げる事例はいくつかの可能性を秘めています。第一に、地域資源の発見と経営資源の調達を同時に実現する可能性です。これは、冒頭に引用した「2つの『ない』」を克服する手がかりになります。第二に、競い合うことの効用です。良い競争は努力を促し、優れた者から学ぶことを可能にします。一番もじりも、同じ目標に向かう同志には違いありません。地域を越えた横の展開を期待したいところです。

人口減少や財政のひっ迫が進む中で、地域の自立が求められています。かつては、「地域の自立」や「地域主義」というと、いささか教条的で孤立したイメージがありました。しかし現代では、リアルとバーチャルの交流を前提にもう少し緩く構えた方がうまくいくのではないのでしょうか。各地が地域資源を掘り起こして魅力的なイベントを開催すれば、交流が進みます。その過程で、経営資源を蓄積したり、地域文化を醸成したりすることができれば、それは新しい地域活性化のモデルを示したことになるのではないかと考えています。

「おもてなし」の心で全国大会 ―ゲートボール発祥の地を広く紹介―

芽室町商工観光課観光物産係 ● 田川 唯史

◆◆◆ 芽室町とゲートボール

ゲートボールは、1947（昭和22）年に北海道旭川市から仕事で芽室町に来ていた鈴木和伸氏が、戦後の貧しい暮らしの中にあった子どもたちに「何か遊び道具を」と、欧州の伝統的な競技「クロッケー」をヒントに考案しました。手軽で体力的な負担も少ないという特性から、高齢者向きのスポーツとして全国の教育委員会が取り入れ、徐々に脚光を浴びるようになりました。

1980年代には国内競技者が60万人を超える



ゲートボール創始者・鈴木和伸氏

ほどになりましたが、当時はゲートボールが芽室町で生まれたことを知る人は町内にもいませんでした。それが分かったのは1984年11月のことです。全国に先駆けて屋内ゲートボール場が町内にオープンした際、そのことを新聞記事で知った鈴木和伸氏の妻、寿美夫人から「ゲートボールの創始者である鈴木和伸は『芽室』でゲートボールを考え創りだしたのでございます。ゲートボールの原点は芽室なのでございます」との手紙をいただいたのです。

◆◆◆ 全力のおもてなし

ゲートボールの発祥の地が芽室町であるという事実は、町民の心に火を付けました。発祥の地であることを町おこしにつなげようと、町企画係長の宮西義憲氏と総務係長の太野新氏（肩書はいずれも当時）が中心となって検討が始まりました。

その結果、「発祥の地めむろ」が全国に

知れ渡るような大会を目指すことになり、有志を募って一人ひとりが知恵と労力と資金を持ち寄り、「おもてなし」の心を込めた大会を成功させようと動きだしました。そして予算もない中、88人の実行委員は2200人の町民の支えを受け、幾多の苦難を乗り越え1987年8月1日からの3日間にわたる「第1回発祥の地杯全国ゲートボール大会」の開催にこぎ着けたのです。

大会初日、参加者を歓迎するレセプションが開かれました。芽室特産の食材を使った料理でもてなし、郷土芸能の「メムオロ太鼓」を披露。最後は北海道名物「北海道盆踊り」に参加者全員で踊りました。町民による全力のおもてなしが参加者の心をつかみ、「おもてなし全国大会」が誕生した瞬間でした。

翌日の開会式では、地元の若者の発想による聖火点灯式や、幼稚園児のパレード、中学校吹奏楽部による演奏などで、全国から来町した112チーム772人のゲートボーラーを歓迎しました。

第1回から昨年の第32回まで継続して大会を開催し、全国から3424チーム、2万1783人の参加者をお迎えしました。今年も第33回の大会を予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で残念ながら中止することとなりました。第33回は来年8月28、29日に開催する予定です。

大会の運営体制は時代の変化に合わせて少しずつ変わっていますが、発祥の地として全力の「おもてなし」でゲートボーラーをお迎えする心意気は、今も変わらず実行委員に引き継がれています。



ゲートボール発祥の地記念碑



第32回発祥の地杯開会式

ゲートボール人口の減少

高齢者に爆発的な人気を得ていたゲートボールですが、少子高齢化や生活スタイルの多様化により次第に競技人口が減少し、これに伴い、発祥の地杯全国ゲートボール大会の参加者も減っていました。そして、発祥の地杯を創設当初から支えてきた地元ゲートボール協会のメンバーや大会実

行委員も同様に高齢化が進んできています。

世界規模で見れば競技人口は増加していますが、日本発祥のスポーツとして国内競技者の減少は発祥の地の本町としても大きな課題と捉えており、新たな方向性を検討しなければなりません。

発祥の地杯のこれから

鈴木和伸氏がゲートボールを考案することにな

った原点は、戦後の貧しい子どもたちにも簡単な道具で気軽に遊んでもらおうという、いわば「子どもたちのために」との思いです。

芽室町はその原点を大切にし、若い世代が活躍できる環境を整えることに取り組んできました。

その結果、町内ではゲートボール少年団「マチルダ」や白樺学園高校ゲートボール部が誕生しています。

参加者の減少が続く発祥の地杯全国ゲートボール大会も、親善大会を基調にしながら競技性を高めることでスポーツとしての魅力を

打ち出し、多くの子どもたちが出場を望む大会を目指そうとしています。

本年度からは、日本のゲートボール界を統轄している財団法人日本ゲートボール連合に町職員を派遣しており、ゲートボールの幅広い世代への普及に力を入れたいと考えています。

ゲートボールの楽しさを広めていくには、その楽しさを自ら体現する必要があるとして、役場内に職員の有志からなるゲートボールチームも立ち上げ、練習に励んでいます。昨年は全国大会にも出場しました。

ゲートボール発祥の地として、これからもゲートボールの振興と共に歩み、子どもたち、そして住民の皆様が発祥の地を誇りに思ってもらえる取り組みを行ってまいります。その象徴となる「おもてなし全国大会」の挑戦は続きます。

ファッション学ぶ高校生の「甲子園」 —流行に敏感な東北の地・弘前で20年—



弘前商工会議所ファッション
甲子園実行委員会事務局

・吉澤 佳苗

ファッション甲子園とは

2000年2月に青森県が策定した「ファッション振興ビジョン」に基づき、21世紀のファッションを担う人づくりを目的に高校生を対象にしたファッションデザインコンテストが実施されました。初年度は北東北3県（青森県、岩手県、秋田県）を対象に開催したところ、非常に大きな反響があったことを受け、対象を全国に拡大して2001年に「全国高等学校ファッションデザイン選手権大会」（通称「ファッション甲子園」）がスタートしました。2004年12月には事務局を青森県庁から弘前商工会議所に移し、弘前商工会議所と青森県、弘前市、青森県アパレル工業会で実行委員会を組織してファッション甲子園を運営しています。

ファッション甲子園は、その名の通りファッション性とデザイン性を競うコンテストですが、出場しているのはデザイン系学科の生徒ばかりでは

ありません。普通高校、工業高校、総合高校、農業高校、特別支援学校まで幅広い層の生徒が参加しています。

コンテストはデザイン画による1次審査を行い、これを通じたチームは実際に衣装を制作し、大勢の観客の前でのファッションショー形式による最終審査で上位を競います。1次審査には毎年約3000枚の応募があります。デザイン画であっても、衣装を仕立てるときに使用する生地イメージをデザインに落とし込んでいる作品が多く、高校生のレベルの高さを感じています。

どうして弘前で？

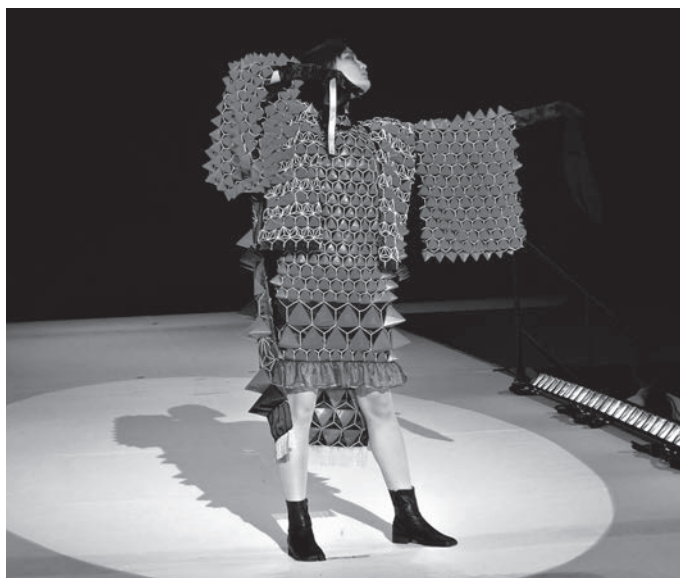
ファッション甲子園は昨年の開催で19回目を迎えました。初対面の人には100%聞かれるのが「どうして青森・弘前でファッションなのか」という質問です。弘前市は江戸時代に津軽藩の城下町として栄え、第2次世界大戦後は東北初の百貨店「かくは宮川」がオープンする（19

78年に閉店）など、東北圏内では流行に敏感な気質を持ったファッション感覚の高い街です。弘前市内および周辺一帯の津軽地方には高い技術力を持つ縫製工場が数多く立地し、国内のみならず国際的なコレクションで着用する衣装を手掛けている工場もあります。こうした土地柄もあり、2000年当時の青森県知事がファッションデザインコンテストの開催を決めた際に弘前の地が選ばれました。

地域に根差した大会を目指して

北東北3県大会も含めると20年間、弘前市でファッション甲子園を開催しています。「継続は力なり」ということわざがありますが、回を重ねるごとに大会の認知度は上がり、今では毎年のように最終審査会の会場へ足を運んでくれる弘前市民や青森県民が大勢います。昨年開催されたファッション甲子園2019最終審査会で来場者にアンケート調査をしたところ、約3割が3回以上ファッション甲子園を観覧したことがあると回答しました。観覧された人からは「今年も良かったよ！」「また来年楽しみにしているよ！」と声を掛けてもらうこともあり、大変励みにしています。

しかし、一方では「弘前市民だけど娘が出場することになって初めて知った」「会場までのタクシーの中でファッション甲子園の話をしたが、運転手は開催を知らないようだった」という声もあり、周知・PR面ではまだまだ課題が山積しています。ファッション甲子園実行委員会では、弘前市民、青森県民へのPRを目的に、弘前市内や周辺地域



ファッション甲子園 2019 優勝作品 (岡山県立岡山南高校)

の商業施設で最終審査会に出場する全作品のデザイン画を展示しています。また5年前からは、弘前市を中心に私鉄路線を運営する鉄道会社の協力を得て、電車の車両内でもデザイン画の展示を行っています。

さらに、ファッション業界への興味・関心を高めてもらうため、青森県内の学生や一般の方を対象にした「ファッションのお仕事最前線セミナー」も毎年開催しています。この事業は、普段なかなか接する機会のないファッション業界で活躍している人を講師に迎え、「ファッション業界にはどのような仕事があるのか」という基本的な内容をはじめ、「ファッション業界の現状」「関連企業の求める人材」などについて講演してもらっています。ファッション業界を志す若い人材に対して、



ファッションのお仕事最前線セミナーの様子

より現実的な目標を設定するきっかけづくりとして、これまで15回(年1回)開催しました。

講師を務めるのは、ファッションデザイナーの他にも、素材にこだわった服作りをしている会社や、近年進化が目覚ましい制作過程デジタル化を進めるリーディングカンパニーの代表など、多岐にわたっています。参加した学生からは、「将来の視野が広がった」「ファッションといってもいろいろなか職種があることを知った」というコメントをもらうなど、毎回好評を得ています。

◆◆◆ 今後の展望

今年度、ファッション甲子園は第20回という節目の大会になる予定でした。しかし、世界的に流



全国から応募のあったデザイン画

行が拡大している新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で中止が決定しています。

これまで約20年にわたりファッション甲子園を開催し、過去の出場者の中には現在デザイナーとして活躍するOGや、ファッション甲子園の出場を契機に服飾の道へ進み、夢を実現したOGもいます。また、ファッション甲子園の優勝校には副賞としてファッションの本場・パリでの研修旅行がプレゼントされ、ファッション業界をより身近に感じてもらう機会も創出しています。

残念ながら、今年度のファッション甲子園は中止になってしまいましたが、今後もファッションの世界を志す高校生を応援し、高校生の夢を実現するための一助を担う大会となるように邁進してまいります。

野球に燃える親父たちの「甲子園」

―風物詩となった全国500歳大会―



大仙市教育委員会生涯学習部次長
(兼) スポーツ振興課長

・伊藤 優俊

50オーバーの産声

昭和53年に行われた、ある野球の紅白試合。秋田県野球協会の会長を務めていた故高橋政泰氏の呼び掛けにより、実戦に参加する機会がなく観戦だけに終わっていた50歳以上のOBたちが集まり、熱戦を繰り広げた。そこは、秋田県の「少年野球発祥の地」として知られる旧神岡町（現大仙市神岡地域）だった。

翌54年6月、今度は新調したユニフォームを着用した28人が再び紅白試合を行い、さらに町内外の大きな反響を得て7月には6チームで「第1回大曲仙北500歳野球大会」（いわゆる郡市大会）を開催した。これに自信を持った選手の間から「今年度は全県大会を開催したら」との声が上がり、同年10月、旧神岡町で記念すべき「第1回全県500歳野球大会」が8チームの参加で開催された。親父たちの「甲子園」が産声を上げた瞬間だ。

生涯現役の夢

自分たちも、まだまだ現役で野球ができる。ただ、体力の衰えはごまかせない。だったら、「高齢者でも楽しめるルールを」ということになった。幾度かの改良を重ね、▽出場資格50歳以上▽1ゲーム5イニング制▽出場選手9人の合計年齢500歳以上▽同じゲーム内で何度でも再出場可能▽投球制限は55歳までの投手は9アウトを取るまで、56歳以上は無制限―など、競技スポーツを原点としながらも、「生涯現役」として野球を楽しめる現在のルールに至った。

このルールを駆使すれば、「野球経験はないが、普段の農作業で足腰は鍛えられている。走りは得意だ」という人でも、チーム内でペアを組むと相方が出塁するたびに代走として何度でも出場できる。いわゆるコミュニティとして野球を楽しめるのだ。

秋の風物詩に

この大会は、当初から秋田魁新報社が主催し、旧神岡町が主管を務めてきた。合併後の現在も同社と大仙市が共催しており、地元の新聞社と自治体がタッグを組むという少し珍しい形で開催されている。これが功を奏する。

新聞紙面での取り扱いには高校野球と同等だ。大会前日には特集号が発刊され、全チームのメンバー紹介や監督の一言などが紙面をにぎわす。大会期間は、全試合について対戦スコアはもちろん、バッテリーや長打のバッターの名前が載り、写真が付くこともある。おじいちゃんが孫に自慢できる唯一のツールとなる。また、県外にいる身内に新聞を送れば元気の便りにもなる。

最初は8チームの出場で開催された大会だが、出場チームは年々増え続け、昨年の第41回では180チーム出場、登録選手数約4500人とマンモス大会に成長してきた。4000人を超える選手が30分以上かけて入場行進し、「花火のまち」の大仙市らしいスターマイン（連発花火）で歓迎する開会式は絶賛を博す。試合では、応援に駆けつける家族の姿も定番となり、今や500歳野球大会は地元・秋田の秋の風物詩となっている。

いざ全国大会へ

平成26年に出場チーム数が180を超え、ここ数年は県外のマスメディアからの問い合わせも増えてきた。同時に、参加選手や関係者から「そろ



全県 500 歳野球大会の開会式



第 1 回全国大会開会式で整列する選手



第 3 回全国大会決勝の一場面。セカンド走塁でクロスプレー

そろ全国大会を目指せないか」との声が聞こえるようになった。

「全国大会を仕掛けるなら今しかない」。そんな思いで、大仙市長や秋田魁新報社長に協議を申し出た。平成 29 年度の開催を目指して準備を進めることで了承されるが、準備期間は実質 2 年しかなかった。

全国大会をうたうなら、北は北海道、南は九州・沖縄から出場チームを募らなければ「不発弾」に終わる。その P R と普及活動で最初に目を付けたのが、「野球でまちおこし」を手掛け「野球のま

ち推進課」がある徳島県阿南市だ。

阿南市と徳島新聞社を訪ね、秋田と同様の取り組みで徳島県大会を開催し、500 歳野球を県内に普及してもらいたいと願い出た。それを快く受け入れてもらい、平成 27 年秋に徳島県 500 歳野球大会が開催された。その後の 2 年間は、北海道から九州まで各地の野球連盟、自治体、マスメディアなど約 50 団体・社に P R や開催を働き掛けてきた。

平成 29 年 7 月、記念すべき「第 1 回全国 500 歳野球大会」が 12 都県の 32 チームで幕を開けた。

昨年の第 3 回大会では北海道からも出場し、県外の出場チームは 32 チーム中 22 チームと着実に増えている。

目標は夢の甲子園。全国 47 都道府県代表の「野球に燃える親父たちの甲子園」として、大仙市が第 2 の聖地となることを目指している。だが、今年は新型コロナウイルスの影響により中止となった。野球に燃える親父たちの今年の「対戦相手」はノーシードの新型コロナになってしまった。妥協しない親父たちの情熱と生き様を見せてもらいたいと願っている。

老若男女が競う「くちびる美人」 ―「紅花」産地の温泉PRでスタート―



天童温泉協同組合理事
(栄屋ホテル代表取締役)

・山口 幸

天童温泉(山形県天童市)の観光振興のため、「全国くちびる美人コンテスト」と銘打った、一風変わったイベントを1989年より始めました。山形県の県花「紅花」が口紅の原料として使われていたことにちなんだ催しで、毎年6〜9月に開かれます。第30回となった2018年のコンテストは天童市の市制施行60周年と重なり盛大に行われました。山形における紅花の歴史とこのコンテストの30年を振り返ります。

紅花と山形県

紅花の栽培は、江戸時代中期を境に最上川流域で急速に拡大し、最盛期には全国の出荷量の半分近くを占めました。日本の特産物を相撲番付に見立てた「諸国産物見立相撲」では、東の関脇が「最上紅花」で、西の関脇が「阿波の藍玉」とされていました。

最上川の舟運を通して山形と京都・大阪が深く結び付き、これに乗じて紅花商人たちが活躍したこ

とが産地の拡大につながったと考えられています。

紅花商人たちは、山形から紅餅を京に出荷し、その帰り荷として古着や塩、魚、お茶などを持ち帰りました。行きで儲かり、帰りでも儲かるため、この商売は「ノコギリ商売」と呼ばれたということです。

最上川流域の市町村には、富裕を競った紅花商人たちが京から持ち帰った江戸時代のひな人形が今でもたくさん残存しており、「山形雛のみち」とか「庄内雛のみち」と呼ばれるほど、ひな祭りが盛んに行われています。

一方、紅花から採れる口紅・頬紅用の紅は、生花の重量の0・3%程度と少なく、江戸時代には「紅一匁金一匁」と言われるほど高価なものでした。このため、紅はごく一部の裕福な人々しか使えど、紅花を摘む農家の娘たちとは無縁のものでした。

天童温泉とくちびる美人

山形県は1982年に紅花を県の花と制定し、

観光振興のため1997年まで「紅花の山形路」と銘打った観光誘客キャンペーンを行ってきました。最近では、地元の観光関係者の協力を得て、機能的食材として注目される紅花を使ったオリジナル料理を開発し、観光旅館やホテル、飲食店に普及させようというを入れています。

「紅花の山形路」をテーマにしたJRとのデスティネーション・キャンペーンが1982年度と1988年度に実施され、天童温泉としても観光誘客に取り組むことになりました。その一環として天童温泉協同組合青年部が立ち上げた事業が、全国くちびる美人コンテストです。

老若男女を問わずだれでも参加でき、口紅を付けて紙に口づけし、リップマークの印影を競うというユニークなコンテストです。第5回から天童温泉の女将で組織する「お駒会」が引き継ぎ、現在の形となりました。

時代の変化とともに、「ベストリップ賞」「セクシールリップ賞」「ダンディリップ賞」「チャイルドリッパ賞」「カップルリップ賞」と表彰部門も増やし、天童温泉を訪れたお客様に、山形の歴史や紅花との関連性、北前船で栄えた文化などに少しでも興味を持ってもらえるよう創意工夫を加えてきました。

このほか、天童温泉を訪れなくても応募できるようにインターネットを活用した「ネット賞」を創設したり、コンテストのPRを兼ねて仙台や東京で「出前コンテスト」を開催したりしています。また、近年は台湾など諸外国の来訪者の参加も増えており、毎年3000〜4000点ほどの応募があります。

各部門の昨年度の賞金・賞品は▽ベストリップ



「第31回全国くちびる美人コンテスト」くちびる審査の風景

賞Ⅱ10万円(1人)▽セクシーリップ賞Ⅱ5万円
(同)▽ダンディリップ賞Ⅱ3万円(同)▽チャ
イルドリップ賞Ⅱ豪華賞品(同)▽ファミリー賞
Ⅱ季節のくだもの(1組)▽旅館えこひいき賞Ⅱ
特産品(12人)▽ネット賞Ⅱ山形の米「つや姫」(3
人)ーとなっております。

芭蕉と天童

松尾芭蕉が元禄2年(1689年)7月13日に
天童の地を訪れ、「まゆはきを佛おもかげにして紅粉べにの花」
「行く末は誰が肌ふれん紅の花」と詠んだことに
ちなんで、天童市では「おくのほそ道 天童紅花
まつり」を毎年7月上旬に開催しています。紅花
摘み体験や紅花染め体験、紅花リップクリーム作
りなどを実施しており、天童を訪れたお客様が楽
しみながら紅花への理解を深めてもらえるイベン
トになっています。

紅花と食

紅花は染料だけでなく漢方としても用いられて
おり、紅花料理が健康食として地元で開発されて
います。旅館や飲食店でのオリジナル料理のほか、
紅花やその若葉を使ったアイデアレシピをコンテ
スト形式で募り、レシピ集を作ってまちおこしに
もつなげています。

2020年度は、新型コロナウイルス感染予防
で残念ながらすべてのイベントが中止となりました
が、来年度には多くの皆様の笑顔に出会えます
ことを心待ちにしています。

コロッケによるまちおこし —全国フェスティバルで味を競う—



龍ヶ崎市商工会事務局長

● 大竹 昇

市街地活性化対策

龍ヶ崎市は茨城県南部に位置し、緑と水に囲まれているが東京・都心へのアクセスもよく、抜群の子育て環境を備えた魅力的なまちです。

市は平成12年6月、中心市街地活性化対策として、移転した銀行の跡地に全国でも大変珍しい公立の漫画図書館「市街地活力センターまいん」を開設しました。幅広い世代の人々が憩い、集い、交流ができるよう、3万冊以上の漫画をそろえた閲覧コーナーと5台のパソコンを設置。漫画の「ま」とインターネットの「いん」を取って「まいん」という愛称にしました。

しかし、少子化やネットの普及で利用者が減少していたため、漫画図書館を閉館して高齢者向けの健康増進施設を開設することになり、令和2年2月に「まいん」の名称を継承した「まいん健康サポートセンター」がオープンしました。介護予防や認知症対策のプログラムを提供し、高齢者の

健康寿命の延伸や交流促進を図る拠点になっています。

商工会女性部が考案

この漫画図書館に来館する子供たちに、大人になっても懐かしく思い出に残るものを食べてもらおうと、龍ヶ崎市商工会女性部が始めたのが、ロースポークなど地元の特産物をふんだんに使った「龍ヶ崎まいんコロッケ」の創作・販売です。

当初はまいん専用駐車場で販売していましたが、予想以上に好評だったため、この活動を中心市街地全体の活性化につなげようと、平成13年7月からは商店街に面する都市公園で販売を始め、毎月第一日曜日に約30店舗による地元名産品の販売やステージイベントを行う「まいんバザール」を開催。令和2年2月時点でバザールの開催は223回に上りました。

現在では、商店街のにぎわいや市民相互の交流を目的とした「チャレンジ工房どらすて」（龍ヶ



チャレンジ工房どらすて（龍ヶ崎コロッケ会館）

崎コロッケ会館）を拠点として活動しています。

コロッケクラブ誕生

コロッケによるまちおこしが多くのメディアに取り上げられ、龍ヶ崎コロッケは全国的に有名になりました。そこで、コロッケを活性化の起爆剤にしようと、スーパーや飲食店、精肉店などと連携して、平成15年に「コロッケクラブ龍ヶ崎」（現在の加盟店19店舗）を組織しました。これまでに同クラブとして、まいんバザールで「我が家自慢のコロッケコンテスト」を5回開催しています。

龍ヶ崎コロッケは平成26年7月、ヤフージャパン主催の「第2回ご当地メシ決定戦2014」で優勝し「日本一」の称号を手にし、平成29年には特許庁の地域団体商標にも登録されました。県内では3番目の登録です。

流通経済大学と連携

平成16年、歌手で女優の五月みどりさんが「龍ヶ崎コロッケ親善大使」に就任しました。それを機に、五月さんが歌う「コロッケの唄」に合わせて「どらコロッケ」が考案されました。考えたのは、地元キャンパスがある流通経済大学スポーツ健康科学部の学生たち。龍ヶ崎のイベントは、必ずこの健康体操からスタートし、大学の陸上部員もボランティアとして参加しています。

全国フェスティバル開催

平成21年11月、同じくコロッケによるまちおこしに取り組んでいる富山県高岡市、静岡県三島市との間で「コロッケの国 三国の共同宣言」を締結し、それを機に「三コロ会」を結成してイベント交流を図っています。そうした中、平成25年11月に龍ヶ崎市制施行60周年記念事業として「第1回全国コロッケフェスティバルin龍ヶ崎」を商店



第4回全国コロッケフェスティバル in 龍ヶ崎の商店街大通り会場

街大通りで開催しました。

「三コロ会」を軸に、コロッケでまちおこしを試みている全国の自治体呼びかけたところ、20団体が参加し、約5万人の来場者でにぎわいました。イベントの目玉は、来場者の投票により人気ナンバーワンを決める「コロッケナンバーワンコンテスト」。そして、女性による「コロッケ大食いバトル」や五月みどりさんのトークショーなども開催しました。

全国コロッケフェスティバルは、三コロ会の持ち回りで順次、三島市、高岡市で開催され、平成26年10月に第4回フェスティバルを当市の商店街大通りで開催しました。北海道から九州までの計35店舗が出店し、7万人を超える来場者がありました。

このフェスティバルでは、JR常磐線龍ヶ崎市



第7回全国コロッケフェスティバル in 龍ヶ崎の表彰式



関東鉄道竜ヶ崎線コロッケトレイン

駅と市中心部の4・5^キを結ぶ関東鉄道竜ヶ崎線の車両を「コロッケトレイン」として運行（所要時間7分）。コロッケの食品サンプルをつり革に付けて、ユニークなステッカーで車内をデコレーションしました。たくさんの人たちがこれに乗ってイベント会場にやってきました。

昨年10月には、当市で3回目となる第7回フェスティバルを開催しました。当日は天候にも恵まれて過去最高の39店舗が出店し、日本一の味を競いました。地元からは高校生も参加し、全国に「コロッケのまち龍ヶ崎」を発信したところです。

コロッケ求め遠方から

コロッケによるまちおこしを始めて今年で20年目になりますが、コロッケクラブ龍ヶ崎は新作コロッケの開発や市外・県外のイベントへの出店など、引き続き意欲的な活動に取り組んでいます。また、商工会と行政も常に連携してフェスティバルの開催や情報発信に努めており、こうした活動が龍ヶ崎コロッケを全国的に有名にし、コロッケを買い求めて遠方よりお越しいただけるまちになったのだと思っています。皆さまもぜひコロッケのまちにおいでください。お待ちしております。

北アルプス山麓で

全国初の囲碁村づくり

— 知事杯・市長杯目指し2000人参戦 —

大町市総務部企画財政課
企画調整係 主任

・ 西條 哲也

きっかけは雑誌のコラム

大町市は、長野県の北西部、松本平の北に位置し、西部一帯に峻険な北アルプス山岳を連ねています。市街地の標高は700m以上。典型的な内陸性の気候で、北アルプスの山々を映す仁科三湖や清冽な河川など、四季折々の変化に富んだ美しく豊かな自然環境に恵まれています。立山黒部アルペンルートや国営アルプスあづみの公園をはじめ多くの観光資源も有し、年間300万人を超える観光客が訪れる山岳観光都市です。

大町市では、平成5年度に「アルプス囲碁村構想」を提唱し、日本棋院の全面的なバックアップをいただきながら、全国初の試みとなる「囲碁村づくり」に取り組んでいます。現在では、全国の囲碁ファンの中で「アルプス囲碁村」大町市として定着していますが、著名なプロ棋士を輩出し

たわけでも、碁石や碁盤などの産地でもない大町市が、なぜ囲碁によるまちづくりに取り組むことになったのか、その経緯について紹介したいと思います。

アルプス囲碁村構想が提唱された当時は、全国各地の自治体において、「ふるさと創生1億円事業」を活用し、温泉開発や話題となるミニユメント制作など「特色のあるまちづくり」「個性のあるまちづくり」「ユニークなまちづくり」を目指した取り組みが盛んでした。

大町市でも、豊かな自然環境を活用した「個性あるまちづくり」「心豊かに生きるまちづくり」を模索する中、ある囲碁雑誌のコラムが目にとまりました。そこには「首都圏から3時間程度で行ける宿泊施設や温泉がある観光資源の豊かな地で、全国の囲碁ファンが集い、好きなだけ碁が打てる夢のような場所が欲しい」と書かれていました。北アルプスの壮大な景観に加え、黒部ダムや

仁科三湖、温泉施設などの豊富な観光資源がある大町市は、まさに囲碁ファンが求める夢のような場所にぴったりと、日本棋院に名乗りを上げたことが始まりです。

囲碁は、誰にでも楽しめる簡単なルールながら奥行きのある深い知的なゲームです。しかも、単にゲームとしてだけでなく、礼に始まり礼に終わるといわれる囲碁は、人間形成や人材育成に非常に役立つとされています。大町市も「まちづくりは人づくりから」という視点に立ち、「囲碁を学ぶ」のでなく「囲碁に学ぶ、囲碁で学ぶ」という考え方をもとに、市内の幼稚園・保育園や小学校を中心に行われる普及啓発活動を通して人づくりに精力的に取り組んでいます。

アルプス囲碁村まつりの開催

「パチッ、パチッ」。普段はスポーツを楽しむ声が響く総合体育館の大アリーナに、老若男女が碁石を打つ音が。

3000m級の山々が連なる北アルプスの山肌に特徴的な雪形が現れ、山麓の木々には青々とした若葉が繁る5月下旬、大町市では春の風物詩となっている「アルプス囲碁村まつり」の幕が上がります。

このイベントは、温泉宿に宿泊し、憧れのプロ棋士から指導碁が受けられる前夜祭と、長野県知事杯・大町市長杯を目指してクラス別で対戦する囲碁大会で構成されています。平成8年、世界アマチュア囲碁選手権戦が大町市で行われたことを記念して第1回大会を開催し、回を重ねて昨年第



白熱したプロ棋士による指導碁



憧れのプロ棋士と記念撮影



プロ棋士による親子囲碁入門教室

19回を迎えました。

前夜祭では、毎年参加していただく二十四世本因坊秀芳先生をはじめとする総勢8人のプロ棋士による指導碁を行います。子どもから中高年までの愛好者を相手に熱心な指導が行われ、白熱するあまり終了時間を超えても指導が続けられるほどでした。

その後の懇親会では、アトラクションの「二十四世本因坊秀芳からの挑戦状」(詰碁)に大勢の方が参加。「全問正解者はアマ5〜6段に相当する」(秀芳先生)という難易度の高い挑戦状となりましたが、予想以上に当選者は多く、参加者のレベルの高さがうかがえました。見事に全問正解

した23人の中から抽選で10人に、参加プロ棋士全員のサイン色紙や、地元の銘菓「雷鳥の里」が秀芳先生から手渡されました。

普段は経験できないプロ棋士との交流に加え、1年ぶりに再会した囲碁村の仲間と大町市の銘酒に舌鼓を打ち、北アルプスの麓の天然温泉で癒やされるひとときは、まさに至福の時間となりました。

翌日は、市総合体育館で「長野県知事杯・大町市長杯争奪囲碁大会」が開催され、首都圏はもとより遠くは福岡県や広島県など全国各地から約200人が参加する中、地元・大町岳陽高校の生徒が選手宣誓を行い、各階級に分かれて熱戦を繰り

広げました。

また、囲碁普及の試みとして、市内の年長児と保護者を対象に、プロ棋士による囲碁入門教室を開催したところ、10組の親子が参加しプロ棋士の温かい指導を受けながら、熱心に囲碁を学んでいました。こうした機会を通じて、さらに若い囲碁愛好者が増えることを期待しています。

交流の輪のさらなる拡大へ

近年、アルプス囲碁村まつり参加者は、各地で開催される様々な囲碁大会の影響や、愛好者の高齢化に伴い、年々減少傾向にあります。また、新

型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、人と人との間の距離を保つ取り組みも、膝を突き合わせて碁石を打つ囲碁の世界にとって少なからず影響があると思います。しかしながら、人と人とのつながりを大切にする囲碁の普及活動を通じ、今後も「まちづくりの原点は人づくり」との認識のもと、さらなる交流の輪の拡大につなげるべく、アルプス囲碁村の活動を推進してまいります。

スポーツになった金魚すくい —全国大会に2千人超、夏の一大イベントに—



大和郡山市地域振興課観光戦略室長

● 植田 早祐美

第1回大会に700人

「ゼッケン番号10001番から11000番までの選手は入場してください」

「一般の部1回戦第1組。位置について、よい、ピー（ホイッスルの音）」

大会本番の始まりは、まさにスポーツ大会の開幕と同じです。祭りの出店などでおなじみの金魚すくいを、競技として位置づけた「全国金魚すくい選手権大会」。1995年8月27日、第1回大会が奈良県大和郡山市の三の丸会館（大和郡山市中央公民館）で開催され、全国から696人の選手が参加しました。

その後、回を重ねるごとに参加人数は増え、第5回からは開催場所を大和郡山市総合公園施設多目的体育館（現在の「金魚スクエア」）に移し、今では定員2350人の一大イベント、大和郡山市の夏の風物詩となっています。近年は、8月の第3日曜日（日曜が5回の年は第4）に全国大会

を開き、7月中旬に奈良県予選と大和郡山市大会を開催。北海道から九州まで全国十数カ所でも予選に当たる認定大会が開催されています。去年の大会で第25回となりました。

全国大会の会場内には水槽が26個並び、タレントの司会進行や選手インタビューなどでエンターテインメント性たつぷりに進められる3分間の熱き戦い。大人も子どもも真剣そのものです。1回戦を勝ち残った選手は準決勝、決勝へと進みます。会場の外でも物産店・模擬店が軒を連ね、野外ステージでの催しや、小さな子どもでも楽しめる「とれとれ金魚すくい」など、家族連れで楽しめるイベントとなっています。

世界大会へ

平成30年の大会からサブタイトルとして英語表記の「Goldfish Scooping World Championship」をつけ、世界に向けても発信してきました。ルール動画に英語の字幕をつけたり、申込みフォーム

の英語版を作ったり、日本に住む外国人や海外からの観光客向けに「金魚すくい体験会」を行ったりしています。その結果、英国や米国、カナダ、ベトナム、中国などから41人が参加しました（多くは仕事等で日本滞在中の人ですが）。今後ますます日本の文化「金魚すくい」を海外に発信していきたいと考えています。

選手権大会の競技ルール

大会では、個人戦（小中学生の部・一般の部）と団体戦の部（3人1組）が行われ、約1000匹の金魚（4センチ程度の和金）が泳ぐ水槽から、1人1枚のポイ（紙を貼ったすくい網）で3分間に何匹すくえるかを競います。団体戦では二つのボールを3人で協力して使います。

競技に当たっては、「競技者は必ず片手で競技を行う」「ポイの円の部分に触れて競技をしてはならない」「水槽の壁面を利用してすくい上げてはならない」など細かいルールがたくさん。「ポイを水面から完全に上げず、金魚をボールに流しこんではならない」「体育館シューズもしくはスポーツシューズを着用する」など、回を重ねるごとに追加されたルールもあります。なかでも最も大切な心得は「動物愛護の精神を涵養し、金魚に愛情を持って接する」というものです。

ボランティアに支えられる大会

そのジャッジをするのは、市民ボランティアによる公式審判員です。全国大会では100人を超



灯籠型水槽やテレビ型水槽など実際に金魚が泳ぐ変わり種水槽



金魚の絵が描かれた車止めやマンホール

す審判員が活躍しています。ポイやボールを選手に渡し、反則行為がないか目を光らせ、すくった匹数の確認などを行っています。審判員は毎年募集され、大会前にはルールや匹数の数え方を確認する審判講習会を受けてもらっています。

また、審判員以外のスタッフも市民ボランティアです。練習会場の運営や選手の受け付け、水槽の管理などを行うほか、実行委員として事前会議で意見やアイデアを出してもらっています。市民ボランティアなしでは成り立たない大会です。

◆◆◆ 金魚をモチーフにまちおこし

大会は毎年多くのマスコミに取り上げられ、「大和郡山といえば金魚すくい」「金魚すくいといえば大和郡山」のフレーズも少しずつ根付いてきました。大和郡山を訪れる観光客に「金魚のまち」を感じてもらおうと、街中のいろいろな場所で金魚に触れ合えるようにしています。

商店街では、商店に合った水槽を店の人が手作りし、電器屋のショーウィンドでは電子レンジの中を金魚が泳いでいたり、喫茶店の机が金魚の水槽になっていたり、自動販売機の中を泳ぐ金魚がいたり。商店街を挙げて「金魚のまち」をアピールしています。

平成28年には「全国金魚のお部屋・おうちデザインコンテスト」を行い、変わり種水槽のデザインを募集。優勝作品の「自動改札機型金魚水槽」が製品化され商店街に設置されています。

まちを歩けば至る所で泳ぐ金魚や金魚のオブジェに出会えます。一度皆さんも見に来て下さい。

高校生が熱く舞う「神楽甲子園」 ―伝統芸能と共に生きる安芸高田の子どもたち―



安芸高田市産業振興部
商工観光課 観光振興係長

・松田 祐生

広島県安芸高田市と神楽

広島県安芸高田市は古くから伝承されてきた伝統芸能「神楽」が盛んで、「ひろしま安芸高田神楽」という他にない独自の神楽ブランドに成長しました。神楽を活かした地域活性化の取り組みの中心を担う施設が「神楽門前湯治村」です。この施設は、地域活性化・観光の拠点施設で、全国では他に例のない2000人収容の神楽専用ドームがあります。ここでは年間150日の公演を行い、全国から年に15万人以上が鑑賞に来ます。

高校神楽部のハレの舞台

神楽という資源を活かして後継者育成につなげていこうとする取り組みの一つが、神楽の保存・伝承に日々努力している全国の高校生が一堂に会する「高校生の神楽甲子園」です。神楽甲子園は、毎年7月の最終週に神楽門前湯治村で開催してお

り、全国各地に伝わる神楽を鑑賞することができ、貴重な機会です。昨年で9回目となり年々参加校も増え、全国から18校が参加しました。会場には2日間で5000人以上の観客が訪れ、高校生の神楽と、この大会ならではの温かみのある雰囲気堪能してもらっています。

安芸高田市の子どもたちは、物心ついた頃から神楽ばやしを聞いて育ち、神楽ごっこをして遊びます。保育所の発表会でも神楽が行われます。小学生になると、神楽団から本格的に神楽を教わります。

高校生になってようやく神楽団に所属できるため、「神楽を舞いたいから」と地元の高校に進学する中学生もいます。昼は勉強に励み、夜は神楽の練習、そして、公演活動のお手伝い。出演機会が多い神楽団ともなれば、年間の公演回数が40回を超える団体もあります。子どもたちは、地域の大人たちとの縦社会の中で、神楽と共に社会性を学び、地域の人たちの支えにより成長していると感じています。

子どもたちの神楽に対する熱い思いは、とどまることを知りません。地元の吉田高校に神楽部が誕生したのは自然の流れだったのかもしれない。同校神楽部は学校の文化祭や福祉施設への慰問などを中心に活動しています。神楽部のOBやOGが地元に残り、神楽を舞いつつ、地域を支える人材になっていることは、まことにとても大切なことでした。「何とか部員たちを応援したい」。こんな思いから実現したのが神楽甲子園です。

大会に参加する高校生たちの宿泊は、地域の民泊で受け入れてもらっています。遠方からはるばるやってくる高校生たちを、横断幕を掲げて歓迎します。自宅に宿泊した高校生たちが舞台上で登場する時間には、神楽ドームに出かけて大応援団になります。

2日間という短い期間ですが、別れの時間になるとお互いに涙が流れる場面も。1、2年生には「また来年」、3年生には「またいつか」と再会を約束しています。私の地域でも受け入れており、今大会で3年目となります。1年生のときから来ている子は今年、部長になりました。1年間で子どもたちは見違えるように成長し、この1年の出来事をたくさん話してくれます。これも、受け入

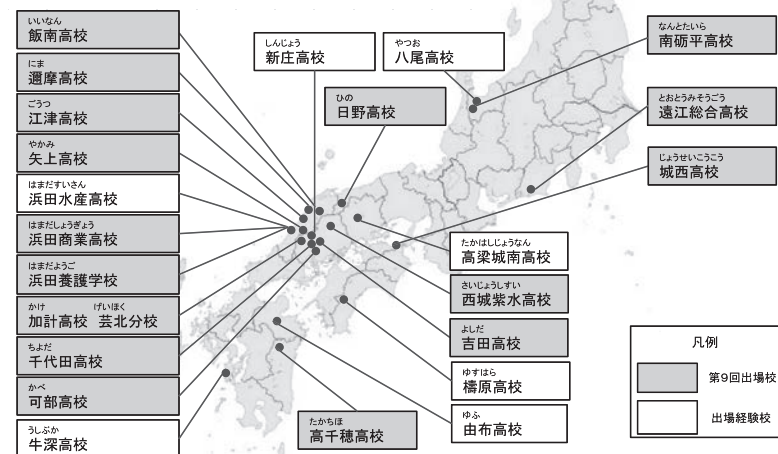


第9回高校生の神楽甲子園の様子

神楽甲子園出場校一覧

県名	学校名	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回
青森	田子高校				○					
岩手	葛巻高校			○		○			○	○
	伊保内高校						○	○	○	○
富山	八尾高校							○		
	南砺平高校									○
静岡	遠江総合高校			○	○		○		○	○
鳥取	日野高校		○	○	○	○	○	○	○	○
島根	浜田商業高校	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	浜田水産高校		○							
	浜田養護学校			○	○	○	○	○	○	○
	江津高校				○	○	○	○	○	○
	矢上高校				○	○	○	○	○	○
	週摩高校							○	○	○
	飯南高校									○
岡山	高梁城南高校			○		○				
広島	吉田高校	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	千代田高校	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	新庄高校	○	○	○		○	○	○	○	○
	加計高校芸北分校	○		○			○	○	○	○
	可部高校		○	○	○	○	○	○	○	○
	西城紫水高校		○	○	○	○	○	○	○	○
高知	橋原高校		○	○		○				○
徳島	城西高校									○
大分	由布高校									
宮崎	高千穂高校		○	○	○	○	○	○	○	○
熊本	牛深高校									

表中の○は運営のみの参加



限界集落だからこそ

神楽の保存・伝承に努力する神楽団にとって、後継者育成は永遠の課題です。神楽は、米の収穫期に合わせて自然や神に感謝する祭りであると同時に、私たちにとっては年に1度の晴れ舞台でもあります。農作業の苦勞から解放されて、みんなで生きた喜びを分かち合う祭りです。

また、氏神社を中心に神楽団があり、神職ではなく氏子自身が神楽を舞う安芸高田市域は、神楽

がその集団内の連携と共同意識を高める役割を担っているといえます。私たちの地域では、いまでも氏神社を中心とした共同社会が神楽を軸に根づいています。人間らしい助け合いを可能にする社会の基礎を形づくっているのが神楽であり、同じように全国に様々な形で残っている伝統芸能・文化こそが地域の誇りだと考えています。

年齢・性別も職業も様々な人たちが集う神楽団は、集落コミュニケーションや情報交換の場であり、それが神楽を舞う者の楽しみの一つにもなっています。私も「桑田天使神楽団」に所属し、団長を仰せつかっています。私にとって神楽とは、

仕事面はもちろんですが、生活の一部になっているといっても過言ではありません。私自身、神楽を通じて皆さんのことを学んでいる最中です。

「限界集落だからこそ、神楽に取り組む」。私が地元でよく使う言葉です。

神楽が将来も地域で生活してもらう一つのきっかけになれば、また、神楽を通して地域を一緒に盛り上げ支えてもらえればという思いを込めています。地域を盛り上げる次世代の担い手になってもらいたいとも願っています。

地域の魅力を広め、そこに多くの人たちを呼び込む「きっかけ」「手段」が神楽であり、保存・伝承はもちろん、観光資源として大切に活用しています。定住人口が減少の一途をたどる中、神楽の魅力を発信することで、若者の定住対策や地域活力の創造、交流人口の増加を目指す取り組みが、安芸高田神楽を活用したまちおこしです。

最後に

観光資源は自然、歴史、文化、施設などさまざまですが、何度も訪れたくなる魅力というのは、地域の持つ雰囲気であり、そこに住む人の温かさやきめ細かなおもてなしではないでしょうか。自分の地域の魅力を再確認し、それを官民一体で盛り上げている地域には、おのずと人は集まってくると思います。

「観光」から「交流」が始まり、それを「定住」につなげる取り組みとして、今後はインナープロモーションの拡充や定住対策などを官民一体で進め、人の魅力あふれる安芸高田市を目指します。

「手話の聖地」ではじける熱い想い —全国の高校生が手話パフォーマンスに挑戦—

鳥取県福祉保健部ささえあい福祉局
障がい福祉課社会参加推進室
(手話パフォーマンス甲子園実行委員会事務局) 係長

● 米澤 章

手話は言語だ

手話は言語だ。7年前、この小さな鳥取県で全国に先駆けて、手話を言語として認め、ろう者やその関係者にとって大きな意味を持つ「鳥取県手話言語条例」が制定された。

同条例では、県における手話の普及に関して基本理念を定め、県、市町村、県民および事業者の責務や役割を明らかにし、ろう者の人権が尊重され、ろう者とうる者以外の者がお互いを理解し共生することができる社会を築くことを目的としている。

本県が全国で初めて手話言語条例を制定したことをきっかけに、今では300を超える自治体で制定され、「手話は言語」という認識が全国に広がってきている。

ただ、実際に多くの方に手話を広めていくためにはどうするべきか。この取り組みをさらに加速させるために、「手話の聖地」となった鳥取県で

何ができるのだろうか。

もうひとつの「甲子園」

手話を広めるために必要なこと。そのひとつは、若い人いかに手話を浸透させるかだ。若い人が情熱を持ち、真剣に取り組むための目標があれば、手話を浸透させることができるのではないか。その目標とすべく、鳥取県で全国の高校生が集まる手話パフォーマンスの大会を開催しよう！それが「全国高校生手話パフォーマンス甲子園」だ。

今年で第7回目となるこの大会には、全国各地から多くの学校が挑戦している。中には「この大会に出場するために〇〇高校に入った」という声もある。私が思っていた以上に、高校生にとっては大きな目標の大会になっており、高校生が目指すもうひとつの「甲子園」として定着している。

全国高校生手話パフォーマンス甲子園はその名のとおりに、手話言語を使ったパフォーマンスを披露する大会だ。ダンスや演劇に限らず、歌唱、漫

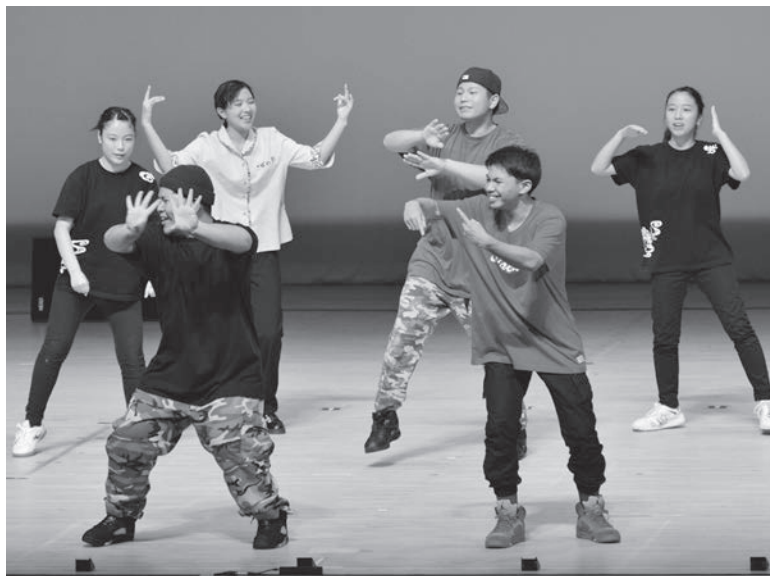
才、コントなど、パフォーマンスであればジャンルを問わない。参加する高校生が楽しみ、情熱を持って取り組めるものであれば何でもいい。

実際に昨年度の大会では、ダンス、演劇、ポエム、歌唱、コントなど演技内容は多岐に及んだ。どのチームのパフォーマンスも真剣そのもので、この大会に懸けてきた思いが表現された素晴らしいものだった。最後には順位がついてしまうものの、本大会に出場したチーム、予選に参加したチーム全てが輝いていた。

それぞれが汗や涙を流して努力した結晶として披露されるパフォーマンスは、観覧者の心を動かし、感動を呼ぶ。同世代の高校生はもちろん、世代を超え、手話のことを考えるきっかけにもなっている。

また、この大会を通じた交流は、高校生たちの成長にもつながっている。予選参加チームや本大会出場チームの中には、聴覚障がい者を対象とする特別支援学校とその他の学校で構成する合同チームがある。聞こえる人、聞こえない人が一緒になって日々努力し、一つのパフォーマンスをつくり上げていく。お互いを理解し、尊重し合うことで次の一歩につながる。

中には、大会が終わってから、もっとうる者のことを理解したい、交流したいと勉強を続けている生徒もいると聞く。そういった先輩たちの姿を見た後輩たちにその気持ちが伝わり、また大会を目指して努力する。全国高校生手話パフォーマンス甲子園をきっかけとして様々なつながりが生まれ、手話の裾野が若い人たちに広がっていると感じる。



【優勝】 真和志高等学校パフォーマンス



【準優勝】 奈良県立ろう学校パフォーマンス



【日本財団賞】 米子東高等学校パフォーマンス

高校生主体の大会運営

この大会は「手話言語」によるパフォーマンスに焦点を当てた大会で、その主役はもちろん高校生だ。

パフォーマンスを披露する高校生のほかに、応援サポーターとして広報を中心に大会を盛り上げる高校生、自分たちが作った商品をマルシェで販売する高校生、ボランティアとして大会の運営を補助する高校生などの参加を促し、高校生主体の大会運営を目指している。

昨年度からは、司会者の1人を高校生に担ってもらっている。この高校生は1から手話を勉強し、

ペアの司会者にフォローしてもらいながらも立派にやり切った。この大会に関わってくれた高校生全てが、本当に一生懸命に取り組んでくれたことが大会の成功につながっている。

大会の力になりたいと高校生が主体となって動

いてくれることで、同年代の学生やその保護者など多くの世代の心に響く。その純粋な気持ちに伝えられるよう、我々はこれまで参加したことのない地域の学校にも積極的に参加を促し、全国に手話の輪を広げていくための努力をする必要がある。

最後に

今般の新型コロナウイルスの影響で、高校生たちも行動を制限され、全国的な活躍の場を奪われている。特に最後の大会に向け努力を重ねてきていた最終学年の生徒の気持ちを考えると、本当に胸が締め付けられる思いだ。

この全国高校生手話パフォーマンス甲子園についても新型コロナウイルスの影響を受け、計画どおりに進めることができない。だが、この大会に出場しようと努力してきた生徒の気持ちに応えることができるよう、状況に応じた可能な形で開催する方針だ。高校生たちが青春を懸けて努力した成果を披露する場となるよう、関係者と力を合わせて大会を成功させたい。

餅は買うものにあらず！

―選手権から学んだ地域の大切さ―



NPOあとう理事長

● 椎木 耕司

◆◆◆ 平成の大合併

山口市阿東地区は周辺を中国山地に囲まれた標高300m前後の高原のまちです。基幹産業は農業でリンゴや梨の生産が盛んなため、それらを利用した観光業も成り立っています。「平成の大合併」で22年に旧阿東町が山口市の一部として編入され阿東地区になった経緯があります。

平成20年に山口県農業試験場徳佐寒冷地分場が閉鎖されることになり、その跡地利用が問題になりました。試験場があった場所は、旧阿東町が土地を所有していました。合併を控えていた町は、その土地と施設の管理者としてNPO法人「あとう観光協会」（現「NPOあとう」）に白羽の矢を立てました。

跡地には水田もあり、その活用が大きな議論となりましたが、数年にわたっていろいろとチャレンジした結果、餅屋と契約してもち米を作付け、販売することで落ち着きました。

◆◆◆ 山口県人の得意技

観光協会が管理することになった跡地の農園では収穫祭を毎年開催してきましたが、集客面では良い効果が表れませんでした。客が来ないのはイベント内容に問題があるのではないかと考え、「自分たちが作付けした農産物で何かできないか」「観光協会としてできることはないか」などと悩んだ末、あることに気が付きました。

山口で生まれ育った人にとっては当たり前なのですが、お祭りの最後に決まって行われるイベントがあります。それは「餅まき」です。もともとは自宅を新築するときの神事でしたが、山口ではほとんどのお祭りで場を盛り上げるため（客寄せのため）に行われています。そのときの参加者の形相と一心不乱な姿は、他県出身の人たちには近寄り難いものがあるようです。逆に言うと、それだけ盛り上がっているということです。

◆◆◆ 餅は拾うものなり！

「餅まき」の光景で見せるあのエネルギーを何とか収穫祭のイベントに利用できないものかと考え、ルールにのっとった競技として行ったら面白いのではないかとということになりました。もち米は自前です。餅の加工業者も地域にたくさんいます。それならやってみようと、「餅ひろい世界選手権」が始まりました。海外の人たちにもこの文化を知ってもらうため、「世界」と銘を打ちました。決まった量の餅を決まった時間内にまき、拾った重さで順位を決めることにしたので、「餅まき」ではなく「餅ひろい」です。

平成23年に始まり、次回が10回目の記念大会と



阿東は県内有数の穀倉地帯



最後の一つが勝敗を決めます

なります。募集人数100人からスタートしましたが、特に海外からの参加者を集めるのに苦労し、地元の大学などをお願いに行ったりしました。現在は300人にまで拡大していますが、募集開始から数日で定員を超えるほど好評です。

競技場は刈り取りの終わった田んぼです。競技者には専用のヘルメットとエプロンを装着させるなど細部にこだわりました。「小学生」「中学生以上の女性」「中学生以上の男性」に階級分けし、それぞれ予選を行います。各予選の上位5人が決勝に進出する方式のため、運の良い人（実力のある人）は予選と決勝の2回楽しめます。

残念ながら予選で敗退しても、拾った餅にはお楽しみシールが貼ってあって特産品の当たるチャンスがあります。



女性部門も遠慮はご法度

ンスがあります。多くの人たちが家族総出で参加しており、最近では事業所の社員や外国人技能実習生が職場ごとに参加するケースも増えました。また、県外からの参加が増えていることにも驚かされています。

◆◆◆ 私たちが本当に拾ったもの

これまで選手権を開催し続けてきて、学んだこととや得たものがあります。多くの協力者、地域では顔が見えていなかった若者、認知されていなかった移住者、ボランティア精神旺盛な学生など、様々な人材が発掘できたこともその一つです。

私たちが住む中山間地域は少子高齢化の進行が

速く、選手権の運営も年々難しくなってきました。人材（協力者）の不足を補うため、地域内で協力者を掘り起こすとともに、地域外でも協力を求め、大学生のボランティア受け入れなどに力注いでいます。また、農産物・加工品を提供してくださる人も多く、大会で提供者の紹介もしています。

選手権の参加者に地区内を周遊してもらえよう観光マップやクーポン券を配布したところ、それを手に周遊される人もいて、提供者から喜びの声をもらいました。運営に当たり、できる限り多くの方に参画してもらいたいと思い、このような方法も取りました。選手権への集客が、わずかであつても地域経済全体に効果を及ぼしていることを実感することができました。

私たちの活動は、設立当初の観光振興という目標を中心としながら、近年は地域づくりへの比重を増やしつつあります。そうすることで、農業を基盤とする観光業も成り立つことに気付いたからに他なりません。人手不足に苦しむ農家のための農業ボランティア制度の確立や、移住者増加に向けたモニターツアーの企画運営・受け入れ体制構築などが現在も進行中です。

気の長い話かもしれませんが、餅ひろい世界選手権を一つのきっかけとして地域の問題が浮かび上がり、今後につながる地域の発展のために一歩前進していると考えます。

「餅は買うものにあらず、拾うものなり！」をキャッチフレーズに選手権を運営してきましたが、私たちはこれからも「もち」ではなく、地域の「ひと」を一心不乱に拾いまくりたいと思います。

舞台芸術で豊かな未来を創造

— 地方から演劇を発信する —

東温市総務部企画政策課
地域振興係長

● 田井 秀一

◆◆◆ 地方創生の文脈からの「舞台芸術」

愛媛県の中央部、人口約3万4000人の東温市に広がる田園の中に、四国・瀬戸内の歴史文化をテーマとしたミュージカルを1年通して上演する「坊っちゃん劇場」がある。地元企業が運営するこの劇場では、俳優をはじめ脚本、演出、音楽、振付など様々な人材が滞在し、一つの舞台作品を創っている。

東温市ではこの文化的素地を活かすため、平成29年6月に「アートヴィレッジとうおん構想」を策定し、舞台芸術の聖地化を目指す取り組みを官民協働で進めることで、人々が多様で創造的な活動ができるまちを目指すこととした。多様で創造的な考え方は、新しいビジネスにも影響を与え、幼児期から接するあらゆるものの質や多様度を高め、生きる力を育む教育にもつながってくる。そうして、住むことが楽しく誇らしい「わが町」をつくり、その環境を求めて移住定住が進むという

「急がば回れ」の地方創生施策として、10年計画をスタートさせた。

◆◆◆ 市民ミュージカルを起点に

起点となったのが、平成28年度に総勢60人の市民キャストにより制作した東温市民ミュージカル「城ノブ」愛媛のマザー・テレサ」だ。坊っちゃん劇場の協力により、市民も忘れかけていた偉人「城ノブ」に光を当てることができ、その波乱万丈な生涯と一途な思いが表現されたミュージカルは、会場となった坊っちゃん劇場の満員の観客を感動に包んだ。

平成29年度には、より多様な表現活動を可能とするための拠点として、坊っちゃん劇場に隣接する商業施設の一部を借り受け、東温アートヴィレッジセンターを整備した。92人収容の小劇場「シアターNEST」、90人収容の多目的稽古場「リハーサルホールNEST」、108人収容の交流スペース「アトリエNEST」の三つのエリアが

らなるこの施設は、文化芸術を通じた交流機会の拡大を図り、地域の活性化につなげることを目的として、平成30年4月に開館した。

ここを活動拠点として、平成30年度からはアートヴィレッジ構想専属の地域おこし協力隊が専門分野のディレクターとなり、演劇、ミュージカル、音楽、ダンス、落語、マジック、コントなど多種多様な舞台芸術の祭典「とうおんアートヴィレッジフェスティバル2018/2019」を開催し、市内外から少なくとも3000人が訪れるようになった。

これが呼び水となり、同センターの来館者数は初年度約1万1000人、翌年度には約1万5000人と増加傾向にあり、芸術活動の拠点として浸透してきていることを肌で感じている。

◆◆◆ 戯曲賞で全国に門を開く

このフェスティバルのメインプログラムとして開催した全国公募の戯曲賞が、「アートヴィレッジTON戯曲賞2018/2019」だ。

この戯曲賞は、全国の舞台関係者に劇作という創作活動を通じて直接関わってもらおうという取り組みとして、平成30年度に初開催した。全国的にはほとんど知られていない東温市初の呼びかけで不安はあったが、全国の文化施設や関連雑誌での周知により45作品の応募があった。

最終候補4作品を選定し、平成31年3月、そうそうたる劇作家による最終公開審査をシアターNESTで開催した。審査員も悩み抜いた末、岡山県在住の守安久二子氏が都市と地方、家族のあり



とうおんアートヴィレッジフェスティバル「音の万華鏡」



TOON 戯曲賞 2018 大賞演劇公演「草の家」



TOON 戯曲賞 2018 大賞決定公開審査会

方を丁寧に描いた「草の家」が大賞を受賞した。この戯曲賞により、埋もれてしまうかもしれない才能を掘り起こすことができたことは、舞台芸術の聖地化を目指す上で、大きな価値を持つことになるだろう。

令和元年度は、この「草の家」の舞台化に取り組み、令和2年2月、シアターNESTで無事上演することができた。全国公募の中で選ばれた戯曲の良さを最大限に表現するため、経験豊かな演出家や舞台美術家を香川県から迎えた一方、出演者や照明、音響スタッフなどについては、可能な限り東温市および周辺の人材の関わりにより創作することにこだわった。

さらに特筆すべきは、裏方スタッフだ。この作

品に関わりたいたと、普段は自らが舞台に立っている多くの地元演劇人がボランティアスタッフとして名を連ね、広報・チケット販売から稽古の補助、仕込み、本番、撤収まで、全てに関わってくれた。これらのスタッフの多くは、東温市民ミュージカルの出演者だった。演劇を通して築かれる関係性とは、これほど強固な財産となるのか。そのことを深く認識した瞬間であった。

良好な雰囲気の中で進む創作と戦略的な広報は、チケット販売にも直結した。今後の舞台芸術関連事業の自立化を見据え、決して安くはない入場料を設定した公演は、追加を含む全5公演が前売り完売。満員となる400人以上のお客様が来場し、シアターNEST開設以来の成功公演となった。

公演終了後、多くの関係者から戯曲賞の継続を望む声をもらっている。もちろん、この成果を受け、今後の継続を考えていくことになるだろう。ただ、私は地域活性化に関わるイベント全般において、「継続性」に価値を見いだすことは危険と考えている。開催そのものが目的化した瞬間、そのイベントは形骸化したものになるからだ。形よりも「志」の継続や発展性を重視し、ゼロベースで思考を重ねていきたい。

質の高い関係人口が未来を創る

舞台芸術は、一つの公演を成立させるために何カ月も何年もの時間を要する。その中で、集客数や売上額だけでは見えにくい、質の高い関係人口が創出されていることは間違いない。芸術を通じて地域や考え方、世代の壁を越えて人々がつながることで、次々と市民主体のプロジェクトが積み重なり、束となってまちづくりの力となっていく。

東温市がこれからもどんどん豊かで、面白いまちになっていくことが、持続可能な地域社会を構築し、地方創生を実現する近道だと思っている。

闘牛文化の継承・発展へ全国サミット

―22回大会で無差別級チャンプが激突―

鹿児島県天城町商工水産観光課

鹿児島県徳之島の天城町で2019年5月3日から同4日にかけて、闘牛文化を有する全国各地の関係者が一堂に会し、「第22回全国闘牛サミット in 天城大会」を開催しました。

闘牛文化が残る6県9市町（岩手県久慈市、新潟県長岡市・小千谷市、島根県隠岐の島町、愛媛県宇和島市、沖縄県うるま市、鹿児島県徳之島の伊仙町・天城町）が「全国闘牛サミット協議会」を構成し、輪番制でサミットを毎年開催しています。第22回大会は、徳之島闘牛連合会天城町闘牛協会が主催しました。天城町での開催は11年ぶり2回目です。

同大会では、「闘牛日本一の島」をそれぞれ自負している徳之島と沖縄の現役「全島一横綱牛」（無差別級チャンピオン）同士の対決を模索。沖縄の全島一チャンピオンが徳之島に遠征することでチャンピオン同士の夢の対戦が実現し、「全国闘牛サミット記念日本一決定戦」と銘打って開催されました。

大会当日は快晴に恵まれ、天城町北部に位置する松原闘牛場を舞台に、約4000人の観客が見守る中、11組の熱い戦いが繰り広げられました。

なかでも、日本一の座を懸けて行われた最後の横綱戦は、徳之島全島一チャンピオンの「力道山」と沖縄全島一チャンピオンの「有心邁進龍」が対戦し、観客の興奮は最高潮に。

頭と頭を突き合わせた立ち合いから互角の戦いを見せていましたが、対戦タイムが20分を過ぎたころ、疲れが見え始めた有心邁進龍を、地元の声援を追い風に力道山が攻めたて、2分31秒で勝利を収めました。

日本一の称号を手にした瞬間、観客の歓声とともに「ワイド・ワイド」の掛け声と「手舞い」の波が会場いっばいに広がり、徳之島闘牛の熱気が爆発しました。全国各地から来場した関係者も、その熱量に圧倒されたようでした。

闘牛大会終了後に天城町防災センターで開催された総会では、今年度の事業計画などが承認され、次回の開催地が新潟県小千谷市に決定。また、闘牛文化の振興・発展のために議論が行われたほか、「沖縄こどもの国」の前園長高田勝氏を講師に招き「徳之島・沖縄の闘牛と動物愛護」と題した講演会が開催されました。「闘牛開催地域の交流促進や次世代への継承、地域活性化の推進」などを

盛り込んだサミット宣言が採択されて総会は終了し、その後の交流会で各地域の親睦を深めました。

◆◆◆ 全国各地の闘牛文化

闘牛は全国でもあまりない文化ですが、地域によって様々な特徴があります。徳之島の闘牛は約500年の歴史があると伝えられており、農耕用の牛を戦わせて楽しんだのが始まりとされ、「なくさみ」とも呼ばれています。

1トを超える巨体がぶつかり合う闘牛の迫力も抜群ですが、大事に育てた牛を応援する人々の熱狂ぶりや勝利を祝う手舞いも見どころの一つです。離島という環境下で闘牛は島民にとって数少ない娯楽の一つとして定着し、現在では徳之島の伝統文化として、農畜産業や観光の振興に大きな役割を果たしています。

新潟県小千谷市・長岡市の「越後闘牛」は神事として行われており、重要無形民俗文化財の指定から40年を迎えました。神事のため、闘牛を最後まで戦わせることはなく、「勢子」（闘牛の脇に立ち、共に戦いに臨む人）により人為的に勝負を分け、引き分けとします。様々な技を駆使した牛同士のおつかり合いだけでなく、勝負の最中に割って入る勢子の度胸や技術も見どころです。

島根県隠岐の島町の「隠岐の牛突き」は、承久の乱（1221年）で隠岐へ配流となった後鳥羽上皇を慰めるために、御前で牛を突かせたことが起源といわれ、綱を付けたまま人牛一体となって闘わせるのが特徴です。

全国各地で闘牛大会が開催されていますが、そ



全国闘牛サミット開催



ワイド・ワイドのかけ声とともに

の運営形態は「神事」と「興行」の二つに大きく分かれ、闘牛大会を娯楽と捉える人口（闘牛人口）の多寡により、闘牛文化を取り巻く環境は異なります。

闘牛人口の多い徳之島で開催される闘牛大会は「興行」の色合いが強く、例外を除き、行政等からの大会運営に係る費用の補助などは行われないのに対し、「神事」等として他所で開催される闘牛大会の場合、その運営費用には行政等からの補助

が一部充てられることもあります。その他、徳之島では行われていない取り組みとして、闘牛の購入・飼育・処分等の費用に対して補助を実施している自治体などもあります。

今はまだ、多くの闘牛人口に支えられている徳之島闘牛界ですが、今後の課題の一つとして、少子高齢化が進み闘牛文化の担い手が減少するなかで、文化の継承・存続のために行政のサポートが求められるのかもしれません。

徳之島闘牛界の取り組み

かつての徳之島闘牛界において、「全島一横綱」という称号は「無差別級チャンピオン」に対してのみ与えられるものでした。しかし、今では闘牛の体重別に四つの階級を設け、それぞれにチャンピオン牛が存在します。体重別に優勝旗を設けたことで、闘牛飼養者や関係者にとっての目標がより現実的なものになり、徳之島闘牛界の活性化につながっています。

また、各階級のチャンピオン牛には年3回（1月、5月、10月）のタイトルマッチ戦出場が義務付けられており、同大会は島内外から多くの観客で賑わいます。

世界自然遺産登録を目指す徳之島にとって、今後期待される交流人口の増加に合わせ、より一層PRするためには闘牛の魅力を分かりやすく伝える努力が必要です。今後は行政として闘牛という伝統文化の継承・存続のためにも、たくさんの人々にその魅力を知ってもらえるよう、官民一体となって努めていきたいと思っています。

キラリと光る
わがまち自慢の全国大会

人間活動の原点ゆらす体験を

意味あるものに

―ふるさとイベントを直撃したコロナ禍―



アートフロントギャラリー代表 ・ 北川 フラム

地域おこしの起爆剤となるイベント

さまざまなタイプの美術家が地域に入り、地域の歴史、生活、祭、儀式、食事、道具、産業などの特色を生かして作品をつくる、その過程の活動などが中心となつて多くの人が集まる芸術祭を、現在5つの地域で行っていますが、それが私の仕事の中心です。地域型、あるいはツアー型芸術祭といわれていて、みんな3年に1回の、つまりトリエンナーレといわれているものです。それぞれ、新潟県十日町市・津南町の「大地の芸術祭」、12の島を会場とする「瀬戸内国際芸術祭」、千葉県市原市の「房総里山芸術祭」はらアート×ミックス、長野県大町市の「北アルプス国際芸術祭」、石川県珠洲市の「奥能登国際芸術祭」です。

私は9年前から地域活性化センター主催の「ふるさとイベント大賞」の審査員をやらせていただ

いていますが、こちらは永年続いている神事や祭り、地域おこしの起爆剤になるべく工夫し頑張ってきたイベントなどが対象になっています。例えば奥能登国際芸術祭では、主として9月と10月に100を超える集落で連日行われている「キリコ祭り」や、そのなかで行われる「ヨバレ」という各家庭での食事のモチベーションも重要な要素として組み込まれていたりもするのですが、このキリコ祭りは2015年のふるさとイベント大賞で総務大臣表彰を受けています。期間と場所が限定され、住民の参加度が高いのがふるさとイベントで、これに対し芸術祭の方は50日以上だし、中間年も小さなプロジェクトをやり、通年化しつつあるというのが二つの違いです。

ここで珠洲のキリコ祭りを例にとつて、少し詳しく説明をしてみます。この祭りは「キリコ」と呼ばれる切子灯籠や巨大な行燈の山車を夕方から朝にかけて神社に奉納するというもので、集落総

筆者プロフィール

北川 フラム氏
(きたがわ・ふらむ)

1946年新潟県高田市(現上越市)生まれ。東京芸術大学美術学部卒業。アートフロントギャラリー代表。主なプロデュースとして、「アントニオ・ガウディ展」(1978-79)、アパルトヘイトに反対する動きを草の根的に展開した「アパルトヘイト否!国際美術展」(1988-90)、米軍基地跡地を文化の街に変えた「ファーレ立川アートプロジェクト」(1994)等。地域づくりの実践として、「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」(2000～)、「瀬戸内国際芸術祭」(2010～)等で総合ディレクターをつとめる。2003年フランス芸術文化勲章シュヴァリエ。2006年度芸術選奨文部科学大臣賞。2017年度朝日賞受賞。2018年度文化功労者。2019年イーハトーブ賞。

出の年1回の大行事です。ヨバレという近親者、ご近所さんをお呼びし御膳を出すという風習が今も残っていて、これには誰が顔を出してもよいという素晴らしい習慣があり、私も初めてヨバレに参入した時は「祭りだから」とあたたかくもてなされたよい思い出が残っています。小型のものから16メートルの大きなキリコが5台も出る壮観なものまでいろいろあって、日本でも有数の催事だと思ふのですが、それでも人口減少によってやめ



①目「信濃大町実景舎」Photo：本郷毅史〈北アルプス国際芸術祭〉 ②イリア&エミリヤ・カバコフ「棚田」Photo：中村 脩〈大地の芸術祭〉
③塩田千春「時を運ぶ船」Photo：中乃波木〈奥能登国際芸術祭〉 ④房総里山芸術祭いちほらアート×ミックス ⑤大巻伸嗣「Liminal Air-core」
Photo：Yasushi Ichikawa〈瀬戸内国際芸術祭〉

ざるをえなくなった地域もあり、いくつかの例外を除けば往時に比べてにぎわいはなくなってきたといわれています。ふるさとイベント大賞はここ

に光をあてました。平成26年度の総務大臣表彰をうけました。

珠洲は人口1万3870人（令和2年6月）、本州では人口最小の市です。昭和25年には3万8157の人口があったのにです。日本海にとび出た奥能半島の先端、暖流と寒流が豊穡の海となり、古くから遣唐使、渤海使が漂着し、出雲から北上する古代人の停泊地、時代が下って、江戸時代には北前船の大切な港、さらに言えば里山が急降下し、海と山がほどよく浸しあう山と海の稔りの地、それが、近現代の労働集約化、効率一辺倒、都市化のなかで、それは東京との交通距離によるものか、一気に衰退してしまっただけ。しかし、少し注意をこらしてみれば、神社、仏閣の数はそれぞれ79社、68ヶ寺と密度は高く、地名、名字の多様性は「鳥翅」、「馬縹町」、「万代呂」、「西法司」、「釈迦院」、「茶院」、「塗師」、「熊主」など読めない字がほとんどというぐらいです。「あえのこと」、「高倉彦神社の早船狂言」、「飯田町燈籠山祭り」の貴重な神事の多さ、つまり、文化の蓄積と層の厚さは日本有数のもので、その本来もつ土地の力を生かそうと、地域、行政あげて芸術祭にとり組もうということになったのです。

コロナ禍で見えた社会の真実

ここでみたように、ふるさとイベント大賞は地域にある永く続いた伝統的な行事

や、近年に地域おこしのために考えられた突出したプロジェクトを顕彰しようと24回続けられてきたものですが、そこにあるのは地域の生業をベースとした総合的な底上げの期待です。決してその場限りの観光ではありません。芸術祭もそういうものとして企画されています。この間、新型コロナウイルス（COVID-19）が世界中に広がり、コロナパンデミックとして、ある意味では、第一次、第二次世界大戦を超える世界的な共通体験となり、今なお、というよりこれから冬にかけていつそう世界をおおう不安をもたらしています。これを書いてる現在でも発表されている限りでも世界の感染者は1018万5374人（7月1日10時00分）、死者は5万3862人（同上）日本でも974人（同上）になっています。これからアフリカ、中南米に一挙に拡大し、北半球でも第2波、第3波が予想されています。3月から自粛や制限が行われてきましたが、この移動、共食、集まり、会話の自由こそ人間が人間であるために獲得してきた大切な活動だったことを思えば、私たちはとてつもない事態におちいっているのです。ここには地域にとって大切な問題が横たわっているといます。

いくつかの現象的なことから考えてみます。まずこの新型コロナウイルスは原始的な自然の領域（野生）が侵蝕され、それらが存在していくための変異が文明社会に入り始めたものとされていますが、これはこの50年間言われ続け、ほとんど壊滅的になった地域環境問題そのものの結果です。またこのウイルスと共存していくには人間にその抗体がある程度なくてはなりません、それ



キリコ祭り

奥能登珠洲で夏より秋に行われているお祭り。
勇壮な巨大キリコが町中を練り歩く幽玄な神事



ヨバレ

キリコ祭りで、各家庭で料理をふるまう
能登独自のもてなし文化

には山野草など土の臭いをもつ食材を幼い頃から
食べていた方がよい、土遊びをした方がよいとい
われています。まさに無菌を絶対視する現在の都

市とは真逆のことです。ここに現在の価値観の致
命的なほとんどが集中していると思われます。私
たちがその一部分である自然とほどよく共存しな
くてはならないのです。

次にこの間移動が制限されたことについてで
す。4月7日の緊急事態宣言が発せられてから各
自の移動、外出、飲食の自粛が促され、公式には
今日（7月7日現在）では国内の交通は自由にな
りましたが、外国とはまだ鎖国状態です。また注
目すべきは田舎の集落では圏外者の流入は断固い
やだという場所が意外に多いことです。これに対
して3密が起りやすい首都圏からの田舎へ脱出
したい人が多いとの報告がされています。またリ
モートワーク歓迎の人たちが多いことも事実でし
た。これはもともと都市には刺激と興奮が多く、
大量の消費ができるという若者にとって数年間の
魅力こそあるが、絶え間ない競争と、とんでもな
い情報の多さとロボットのような生活のなかで非
人間的にならざるを得ないなかで都市脱出願望が
多いことと符牒があっていると納得したわけで、
こんな時こそ田舎は都市を受けいれるチャンスだ
と思っていました。残念ながらそうはならなか
った。観光客は良いけれど、いざとなると困る、
不安がある、不信があるというズレの中に私たち
の社会の真実が見えてきたのです。それは真の意
味で田舎には医療をはじめとしたインフラがない
ことによるものでした。巡り巡って田舎こそ医療
がしっかりしなければ駄目だということになりま
す。今回のコロナ禍のもとで、地域環境をこれ以
上劣化させない、市場、効率第一主義を考え直さ
なくてはならない。地域文化をもっと尊重しなけ

ればいけない、という気持ちを大切に思っていく
可能性はあります。生命、健康、予防医学、モノ
と人の移動、グリーンエネルギー、文化、教育と
いった根本的なインフラを大切に考える方向に少
しは行くでしょうが、それがボーズに終わらない
ようにしてはならない、私たちはいまだかつ
てないほど生命、人類が自然と接するための方向
での踏み分道にしているのではないのでしょうか。
ふるさとイベントは、その意味で私たちと自然
との里程標のような位置にいるような気がするの
です。

イベントが現代文明に警鐘鳴らす

さて、ふるさとイベント大賞は昨年度では各県
の推薦120件のなかから次のようなもの選ば
れています。

- ・大賞（内閣総理大臣賞）
地獄の谷の鬼火花（北海道登別市）
- ・最優秀賞（総務大臣表彰）
よさこい祭り（高知県高知市）
- ・優秀賞 能登小木港イカす会（石川県能登町）
- ・優秀賞 RENEW（福井県鯖江市）
- ・優秀賞 柳川雛祭りさげもんめぐり
（福岡県柳川市）
- ・ふるさとキラリ賞
狐の夜祭り（新潟県柏崎市）
- ・ふるさとキラリ賞
農村舞台音楽公演（徳島県那賀町）
- ・選考委員特別賞
フェスティビタス ナタリス（長崎県南島原市）

このうちRENEWはもともと全国屈指のものづくり（漆器、眼鏡、和紙、打刃物、箆笥、繊維、焼き物）の集結地である土地が全国にも声をかけて始めた工房巡りのイベントであり、フェスティビタス ナタリスはもともとキリスト教と縁の深い土地でのクリスマスイベントで、土地の歴史と深く結びついたものでした。その他はその名の通り伝統的なものであり全国的に知られたものです。

以上のふるさとイベントに今年は参加しようと思いましたが、ほとんどのイベントが中止になりました。それはこの後開催のものを含めて、伝統的な行事は限られた人だけでやるというかたちで終わらざるをえなくなりました。もちろん今年度の表彰も、期間をながくって審査しようということになっていますが、世の中の伝統的な行事が中止になるのは、特にそれを励みとしていた人にとってはつらいことです。年一回の行事は、同時にながい、つらい労働のはてにあったわずかな楽しみだったからです。

ここでふるさとのイベントについて整理しておきます。それは地域の神事および自然、生活と結びついていて、しかもその土地で生きていくための生業のなかから生まれ、同時にその辛苦を昇華するためのものでした。それ故に、自然から離れ、自然と対立するものとしての文明をつくり始めた現代の風潮、社会システムに警鐘を鳴らすものとして、きわめて貴重な意味をもっているのです。今年のコロナパンデミックのなかにいて、それがあります大切なものになっていることがわかりました。人としての移動、会話、共食すらできなく

なっている。これは先に述べたように、人類が共通に体験しているつらいことだけれど、これを意味ある経験としなくてはならないし、ここでしっかりしないと、根本なところで奈落に落ちざるをえないと思うのです。

「食」の大切さ伝える プロジェクトにも注目

もうひとつ注目しておくことがあります。昨年は小木港のイカプロジェクトが選ばれています。近年ますます食プロジェクトの大切さが分かってきました。食はその食材、料理法、もてなし方全体を含んで地域と最も深く、一年中を通してかわっているものです。はれの日の料理だけでなく、食材が豊富でない時期のつましい食事を含めて、地味、気候、共同体の在り方、流通が理解できる。それだけでなく、例えば宮崎の冷や汁を名物にしていく過程で、地域のシステムを改良していく働きもあるのです。私がかかわっている芸術祭でも、当初から食の占める重要性は決定的でした。アートは地域理解の入り口にはなりますが、その芸術祭が行われる土地へのリピーター率が高い理由は食によるところが多い。例えば越後妻有の大地の芸術祭では、地域のお母さん達の料理をふるまう「うぶすなの家」から始まって、もてなしに工夫したお芝居入り会食「北越雪譜」、冬のもてなし料理を集落ごとに催す「雪見御膳」、食材のうまさによって焦点をあてたEAT&ART TARA ROさんによる「ザ キュウリショー」、各地の米の特徴をあきらかにする「ザ おこめショー」などの展開から、今では季節の山野草、野菜の加



「うぶすなの家」ランチ (photo Ayumi Yanagi)
大地の芸術祭（新潟県十日町市）の作品の一つでもある「うぶすなの家」。
古民家を使った焼き物ミュージアムではランチの提供も行っている

工品での、通販を考えた活動もされるようになっていきます。食は地元の人達の活躍のわりあいが多く、なおかつその地で採れた食材をその土地の料理法でその共同体の価値そのものであるもてなし方で迎えるならば、それはあきらかに世界一なのです。

今日のコロナの禍で、多くの人々は自らの生活、社会システム、自然環境についていろいろ考えました。話す、動く、たべるという人間活動の原点がゆらぐ体験をしました。そのこととふるさとのイベントは直接的につながっているものです。この間の体験を意味あるものにしたと切に思ったことです。

宝くじは、 みなさまの豊かな暮らしに 役立っています。



宝くじは、図書館や動物園、学校や公園の整備をはじめ、
少子高齢化対策や災害に強い街づくりまで、さまざまなかたちで、
みなさまの豊かな暮らしに役立っています。

一般財団法人 日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や
公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。